

525
220

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

始





序文に代へて

此書の價値は此書の全體にある。私は此書を手にした方が序文を見て略内容を想像するといふので無く、さもなくも本書の全體に目を通して下さる様に願ふ。もしそれが出来なければ、「母の新倫理」だけを先へ読んで貰へばそれで満足する。それを読んで價値が無いといふのであつたら、それまでである。「母の新倫理」を読んでその外のところも読む氣を起さしめないのだつたら、私はそれを私の失敗に數へる。

著者が自分の著作の自賛をする程見苦しい事は無い。よく書物を買つて、あつたらなかつたと思ふこゝがある。私は本書を読んだ

525-220

人が、これを読み終つた後、下らなかつた時間を徒に費つたさだけは言はせない自信がある。それは私の自讃で無い。何故ならば私は私の小さな智識を語つてゐるのでなく、宇宙の眞理を體得した神人の教に則り、例を偉大な婦人に採つたからである。

大正十三年初秋

京にて 著 者

凡 例

著者は、「我友」と題する婦人雜誌を出してゐます。それは凡て著者自ら書いてゐるものです。それに過去一年に母と妻と處女と、此三方面の教訓に就て自ら深く感じて書いたのを材料として、一篇の書籍を編むに至つた、それが本書であることを明らかにして置きます。

目次

第一章 女性の倫理……………一

(一) 女の舊倫理……………三
「女誠」—七去三從—聖人の教

(二) 舊倫理の由來……………七
祖先中心の教—血統の重視—忍従の教育

(三) 女子の覺醒……………一三
舊思想の破船—新らしき女

(四) 婦人解放……………一四
女權運動—新男女同權論—一夫一婦主義

(五) 女性運動の新傾向……………二〇
婦人運動と性的現象—女性の使命

第二章 母の新倫理……………二三

(一) 感恩思想の推移	二五
孝道の根底—生みの恩養育の恩	
(二) 母性の識見	二八
智識と常識—子供との智識の差—	
スザンナウエスレーの常識—母親の心得	
(三) 母性と人格	三七
母親の權威—母親崇拜の根底	
(四) 母と信仰	四三
信仰の要點—母性の運命と信仰	
(五) 母と子	五一
母親の注意—至純の祈り—母の力—「偉い者」—母親の失敗—	
母親の成効—母親と時代	
第三章 母親と子女教育	六九
(一)アレキサンダー大王の母	七一
本能の愛—地上の愛—ナポレオンの母	

(二)子女教育の根底	七九
教育の基礎—子供と信仰	
(三)宗教教育	八五
單純なる教理—人生の波瀾と信仰—	
スザンナ、ウエスレーの娘達—ジョンとチャールス	
(四)母の理想	九九
神様の子—母の責任—母の安心	
(五)母の傑作	一〇七
二重の母—重大なる任務	
第四章 妻の新倫理	一一四
(一)妻の識見	一一五
「お嫁入道具」教育—夫婦の距離—男女の會話—偉人の妻	
(二)妻の環境	一二八
妻の位置—日本の媒介者—同居と別居—舅姑の問題	
(三)妻と信仰	一三八

(四) 妻の心得……………一四八

環境の破壊—環境の活用—雪の中の女—姑と嫁
幸福とは何ぞ—二つのもの一つになる理由—理解と共鳴—
慣るゝ勿れ—進歩と退歩

第五章 女の勝利……………

(一) 運命に對する過信……………一七三

(二) 運命とは何ぞや……………一七五
日本の女性に運命を過信す—結婚物語
運命なるものありや—宇宙觀と人生觀

(三) 運命と播理……………一七八
運命の開拓—老と死—女としての價値の立て方

(四) イエスと女性……………一八二
永遠の紀念—十字架の周圍

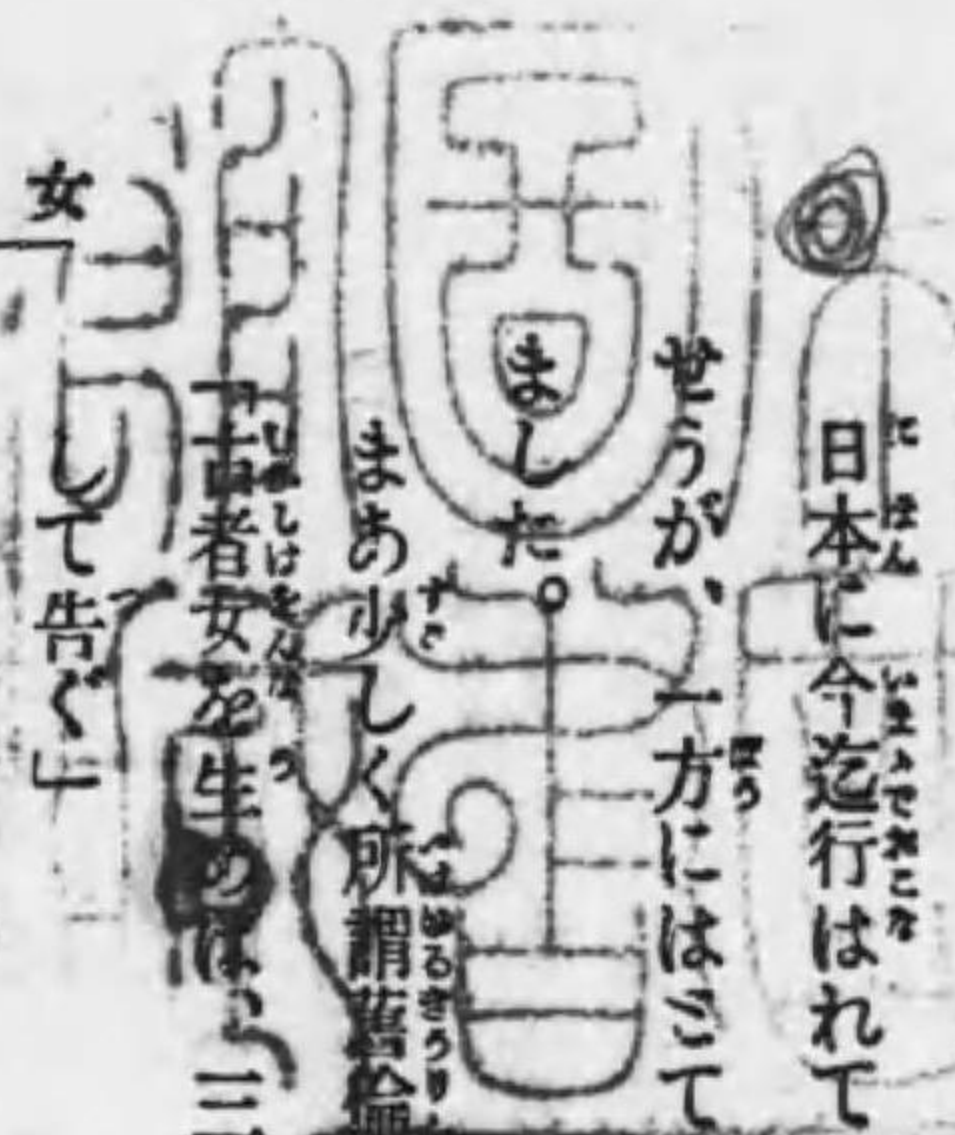
(五) 結 論……………一九三
男と女—美しくしきは女醜きは女—愛の使—愛の聖化—心の美人

第一章 女性の倫理

女 性 の 倫 理

- 一、日本の女性に忍従の美を強ひられて来た。今日の女性は「七去三従」の教等で満足し得られなくなつた。
- 二、男尊女卑の思想は、祖先を大切にする思想から生じた。女はたゞ子を生みこれを育つる器だとしたからであつた。
- 三、日本の婦人は新しい教育を受けて、個人の價値を知る様になつた。そこで反動が生じて新らしき女の一群等が生じた。
- 四、男女同權を主張するは正しい。神の子として男女に上下の區別は無いからである。ことに今日は男女は節操上に於ける同權を叫ぶべき時代である。然し男女の使命はそれ／＼性質を異にしてゐる。男女を同じ様なものにするといふことが同權の意味とはならぬ。
- 五、近代の女性運動の新傾向は、性の相違から男女天分を異にするを證する思想である。要するに女には女獨特の使命があるのである。

【一】 女 の 舊 倫 理



日本に今迄行はれてゐた女の倫理といふものは、それは中には善いものもあつたでせうが、一方には近頃の近代の女性が到底受け入れる事の出来ないやうな點がございまして、まあ少くも所謂舊倫理なるものを考へて見ますと、たとへば「女誠」に「古者女を生むは三日之を床下に臥せしめ、これに瓦磚を弄ばしめ、然して齋して告ぐ」

女 の 舊 倫 理

こある。床下に臥せしむるは、女といふものは一生涯男子に仕へるさいふことを示す爲で、瓦磚を弄ばしむるは、女は一生勞働を主とするを明らかにする爲だといふのだからたまりません。女といふものは他人に仕ふるために生れて来たものである。

いふ、これが即ち舊倫理の根柢であります。

益軒の種俗童子訓の中に「教三女子法」といふのがある。それを讀みますと、いかに日本の女子教育がその主義に由て行はれたかといふことが分ります。

「婦人は人に事ふるものなり。家に居ては父母に事へ、人に嫁しては舅姑夫に事ふるに、慎しみて背かざるを道とす」

ごあるが如き、また

「女は人につかふるものなれば、父の家富貴なりても、夫の家に往きては、其親の家に在りし時より、身を低くして舅姑にへりくだり、慎しむ仕へて朝夕のつこめ怠るべからず。舅姑のために、衣を縫ひ、食を調へ、我家にては夫に仕へて高ぶらず、自ら衣をたゝみ、席をはき、食を調へ、うみつむぎ、縫物し、子を育て、けがれを洗ひ、婢多くとも萬の事に自ら辛勞をこらへて勤むる、これ婦人の職分なれば、我位に身に應ぜぬ程、引さがり勤むべし」

なき。ただ人に仕ふるものとしての道のみが説いてあるやうに見えます。

七去三従といふ教の中に、日本舊來の女の道徳が教へられたのでしたが、それが今日の思想から見ると、大變に縁の遠いものであつた事は、今更申上ぐる迄もありますまい。

三従に就て例の益軒に由るに

「婦人には三従の道あり、凡そ婦人は柔和にして人に従ふを道とす。我心に任せて行ふべからず。故に三従の道といふ事あり。これ亦女子に教ふべし。父の家に在りては父に従ひ、夫の家にゆきては夫に従ひ、夫死しては子に従ふを三従といふ。三つの従ふ也。幼より身を終る迄、我儘に事を行ふべからず。必ず人に従ひてなすべし」

こいつてゐますが、全く女の服従主義を説いてゐるのであります。それが七去の教になると、女に對する不公平な待遇はその極度に達したものでせう。

「婦人に七去とて、悪しき事七つあり。一つにても有れば、夫より逐ひ去らる、理也。故にこれを七去といふ。これ古の法也。女子に教へきかすべし。一には父母に隨はざるを去る、二に子なければ去る。三に淫なれば去る、四に嫉めば去る。五に悪疾あれば去る。六に多言なれば去る。七に竊盜すれば去る。」
 と曰ひ、益軒は精しくそれを説明してゐますが、さう考へても女計りを踏みつけた思想であります。

その中でも「子なければ去る」「三といふが如き」悪疾あれば去る「三といふが如き、何れも言語同断なことであります。益軒も此二ヶ條のみは自分が悪いのではないから婦のことがには非ずといひつゝ、

「妻を娶るは子孫相續の爲なれば子なければ去るも宜也」

などと申してゐます。序に此問題を、中江藤樹は「鑑草」の中にかう申してゐます。

「或人曰く。七去の中、子無き悪疾あるとは忠孝の道にたがへるに似たり。曰

く先儒此發明あり。子無きは不孝の第一なれば、その妻一人を守りては、不孝の罪遁れ難き故なり。されども必ず家に置くべからずには非ず。他の婦人をもこめて子孫相續のはかりごとをなすべしこの事なり。その妻かへすべき方なきか、または去るべからざる理りあらば、必ず去るべきに非ず。聖人の法には夫婦して先祖の魂を祭るおきてなり。然るに癩瘡の如き悪疾ありては、祭祀の役をつむる事ならざる故に、あらためて娶るべしこの事なり、これも歸す方なきか。又去り難き勢あらば、その家にて養ふべし。必ず棄てよとはあらず」

これは中江藤樹の聖人でありませんが、公然と左様の場合は妾をもてば善いではないかこ申してゐるわけでありませう。畢竟女といふものを器として見た、かういふ思想に今日の婦人が倫理の根底を見出し得やう筈が何處にありませう。

【一】 舊倫理の由来

然し私共は今靜かに東洋に於て、さうしてかういふ男尊女卑の思想を生じて來たかといふ事を考へて見ねばなりません。人間の生涯の根底は何處にあるか、まわり遠くても此問題から考へて行く必要がございます。

前申し述べました様な儒者の教を辿つて見ますと祖先を中心とした人生の考へ方が分ります。祖先が大切であるから従つて子孫が大切である。其處でお嫁入りをして、子が生れなかつたならば親不孝になる。従つて妻に子供が無いのにそのまゝ妻一人を守つてゐるのは不孝の罪のがれ難いから妾を探してでも子供を生ませなければならぬといふ様な思想が生じて來ます。一夫多妻が罪惡とせられないのは其爲であります。かうなつて來ますと、女はまるで子供を生む器械の様で、子供を生まない女は存在の價値が無いといふことになります。母としての權威はかういふ考へからは起きないわけであります。

結婚して悪い病が出たら離縁されても仕方が無いといふ教も、中江藤樹に由ると、

汚れた身體では祖先を祀る事が出来ぬから、離縁されても當然であるといつたもので、男子が重んぜらるゝといふ事も、その中ことに長子が尊ばるゝといふ點も、畢竟血統を重んずる思想で、祖先崇拜の遺風でございます。女といふものはかくの如く血統の道具とするに過ぎぬとしたら女子は本來男子に服従すべきものであるといふその思想に落ちるの外はありますまい。

かくて男は尊く女はただ男といふもの、側流に流れてゐる器に過ぎない。母として

の任務は、ただ生むといふことが主なる役目でした。然し婦人も男子も一個の人間としては同等の權利を有してゐるものであるといふ、此點は餘り考へられませんでした。それは久しい間の儒教の感化の爲でした。儒教は次第に女性が忍従の美を示して來る様に教養を與へました。

その結果は唯々として男に服従する女、両親の命するまゝに一生涯を犠牲にするを厭はぬ様な婦人を生じました。何事にも身に定められた運命と、凡ての宿命に忍従す

るを女の美德と、理も無く肯んする女を生じ、其處に様々の美しくい犠牲献身の物語を生ずるに至りました、女の理想として日本の婦人に聞かしめらるゝ支那の物語など皆その忍従の人々でした。

處で明治以後、日本の婦人は新しい教育を受ける様になりました。女は特に女としての教育を受ける前に一個の人間としての教育を學校に於て受ける様になりました。小學校では男女同じ科目で教へらるゝのですから、眞理に於ては男女同等の理解をもつて行くやうになるのは當然の事でございます。日本の婦人の覺醒は誰が最初にしたかと申しますと、それは申す迄も無く明治の學校教育でした。處がその當局者が、智識に於ては婦人を一個の人間として教育しつつ、倫理の方面に於ては、譯も無く昔の倫理に従はせやうとしたのですから其處に大なる矛盾が生ぜざるを得なかつたのであります。

在來の良妻賢母の倫理はどういふ教育から出たかと申しますと

「女子には早く女功を教ふべし。女功とは織り、縫ひ、うみ、つむぎ、すゝぎ、洗ひ、又は食を調ふるわざをいふ。女人は外事なし。かやうの女功を勤むるを以てしわざとす。ことに縫物するわざをよく習はしむべし」(益軒—和俗童子訓)

こいふのですから、今日の女子に得心の行かう筈がございませぬ。新しい教育をするならば、新しい倫理の本體を與へなくてはなりません。其處で明治の初代から、基督教を信するものは、日本の眞の婦人の倫理はイエスの教から來る、即ち男も女も我は神の子であるこいふ思想に新倫理の根底があると主張しました。然しそれを日本の識者が非常に恐れたものでした。西洋では親を粗末にするだの女尊男卑で女の見識が馬鹿に高いのこいつて、盛に非難したものでした。今日先づ基督教の思想を退けるこいたしますと、在來の教に倫理の根底を求むるの外はありません。其處で學問だけはさし／＼西洋流に西洋に負け無い様に行つて行く。そして倫理方面は舊來の絕對服従主義で通して行かうといふ。これが識者の態度でありました。

【三】女子の覺醒

然しながらこれはさうしても破船せざるを得ません。何故ならば舊來の教に由ると女は男に絶対服従すべきもの、様に教へてありますが、實際學校で教へらるゝ學問はそれらしい證據を見せません。一個の人間といふものが人類の單位であるここを自然に學問の中で教へられて行きます。其處に一種の矛盾を感じずにはゐられません。何ぞ申しましたも今日は所謂民主思想の行渡つた世です。民主思想とは一體國民思想に對していふことでせうが、男女問題となりまして、女だけが不公平な取扱を受くるさういふことは、近頃の婦人には承知が出来ません。それはつまり民主思想の影響であります。民主思想とは個人の權利を主張する思想でありまして、つまり男子も女子も、性質として天分として全く異なるものであつても、權利としては異なる者でないさういふ思想を有するにいたるは、今日の人間教育を受けてゐる以上、致方の無い

ことでもあります。此處でも新しい倫理の根底を見出しませんと、婦人の間に大なる動搖が來ざるを得ないでせう。「新しい女子」さういふ一群が現はれたのもその爲でした。彼等は一個人としての權利を女の上に主張しました。彼等は語學をやれば男子に劣らざる事を自覚しました。文章を書いて別男子の眞似が出来ぬと思ひませんでした。その他すべての學問を彼等は男子同様にし得ることを知りました。彼等は折々會合してビールを飲みつゝ、深更迄氣焰を擧げたりしました。我等はもはや自由自主不羈獨立のものであると叫ぶ様になりました。全世界は女の幸福の爲に作られたもの、様に彼等は感じました。「強き者よ汝の名は女也。」かう叫んだりしました。然し果してそれは凡ての女の心に共鳴を興うる感じでせうか、さう叫ぶ心の中に、いひ知れず美しい女の心は宿らなかつたでせうか。

【四】婦人解放

一方女権運動なるものが生じて、男女が同権であることを主張しつゝ、男のやる事は何でも女もやるべきであるといふ、所謂極端な婦人解放論が盛に唱へらるゝ様なことになりました。

これ等は畢竟近代教育の結果として生じたところのもので、此儘で行つたら、何處まで婦人の思想は變つて行くか分らぬとまで思はれました。其處で日本の識者は儒教の復活をして昔の女子絶対服従主義に戻して行かねば大變な事になると騒いだ事もあります。これじや男も女も同じ様なものになつて、子供を育てる事すら厭ふやうになりはしないかこまで危ふまれたものであります。

此處で男女同権といふ問題の研究に入るわけですが、そもく男女同権といふ意味は何でせう。男と女が一個の人間として同等の権利を有つてゐるといふ事ならば、

勿論男女同権といふ事は正當な話であります。神の子として男と女とに何の権利の區別はございませぬ。然し男のすることは女もなし、女の事を男もなし得るかといふ點になりますと、それは別の問題となつて参ります。此の處を混同しない様にせぬと婦人問題ははつきりしないと思ひます。

特に男尊女卑といふ様な主義に立つていふことは、男女同権を無視した考へでこれは宜しくありません。然しその同じ権利を有した人間が、男となり女となり良人となり妻となつて各々その分を全うして行くのです。此點を私共は明らかにしたいのであります。

日本に於ても男尊女卑といふ考へは、或程度迄は改良されて来たかとおもひます。早い話が西洋では夫婦で道を行く時に勿論並んで歩く、日本では昔だに良人の方が先へ立つて歩き、奥サンの方は二三尺隔たつて歩く、コンナ事は今日では餘り見られなくなりました。やはり並んで話しつゝ歩いて行くといふ様なのが多くなりました。所

が節操といふ問題になつて來ると、日本の道徳的觀念はまだ發達を致しません。妻が良人の外に男を作つたら、それは姦通者ニ稱へられますが、良人が妻以外に女を有つたさいふ場合、それは不道德は見られるでせうが姦通は見なされてゐません。それは法律上の議論はともかく、個人の權利としては婦人の最も主要な節操上の權利を蹂躪したものと申さなければなりません。

基督教に於ては嚴重な一夫一婦の教に養はれて行きます。一夫一婦は明らかに此節操上の男女同權を意味してゐると申す事が出來ます。遊廓廢止であるとか藝者全滅だとかいふ運動も、直接の社會事業として必要なことではありますが、もしそれが一夫一婦主義者を多く作つて行くといふこと、並行しませんならば何の甲斐もない事になるのであります。節操を重んずる男子が生じないならば、遊廓が無くなれば私娼が多くなりませうし、藝者が無くなればやとなにか何にか風儀を亂すものが多くなりませう。畢竟は男子と女子と節操に於て、同權であることを自覺せしむるのが第一で

あると存じます。

かういふ點に於ては極力男女の同權を主張しなければなりません。其は男も女も神の子として全く同一の特權を與へられてゐるからでございます。然して一方女子が參政權を得なければならぬとか、さういふ様な方面に於て、同權を叫ぶといふ事になりますと、問題がガラリ變つて參ります。男と女と、それらに與へられてゐる使命がございませう。その使命に生きるさいふことはそれが各自の特權を發揮することになります。

それは女といふものに與へられた體格や、容姿や性質を見ても一見直ちに男では眞似の出來ぬ特權が與へられてゐるのを見ます。幼兒の時から女には女らしい美しくさが現はれてゐます。幼ない女の兒が誰に教へらるゝともなく、小さな枕を着物で包んで、赤チャンに見立て、「ネネシナ、ネネシナ、ネネシナ」にか何かいつて寝せて付けてゐる様な遊びを見るに、何とも云へぬ感じに打たれます。あの時からもう母性の責

任（じん）こいふものが、本能的（ほんのりてき）に女（おんな）には與（あた）へられてゐるのであります。母（はは）とならない婦人（ふじん）にもその母性的（ぼせいてき）な美（うつく）しい性質（せいしつ）が世（よ）を美（うつく）しくして行（い）きます。その點（てん）に男（おとこ）がきりこんで行（い）つて、女（おんな）と同じ（おな）ことをしやうたつて出來（でき）る筈（はず）がございませぬ。それと同じ（おな）様に男（おとこ）は男（おとこ）に與（あた）へられてゐる使命（しめい）がある、それに女（おんな）が携（たづな）はらぬといふ事は決（けつ）して女の權利（けんり）が輕（かろ）んぜられたこゝを意味（いみ）しない。それは明（あき）らかにして置く（お）く必要（ひつよう）がございませぬ。

米國（べいこく）にゐりました時（とき）、女（おんな）が日本（にほん）よりも多（おほ）く社會（しゃかい）に活動（かつどう）してゐるこゝを見（み）ました。たゞへば圖書館（としよかん）へ參（まゐ）りますと、館長（かんちやう）をはじめ、館員（かんいん）皆（みな）女性（ぢよせい）でした。扱方（あつかひかた）が濃（こま）やかで非常（ひじょう）に結構（けつこう）だと思（おも）ひました。また郵便局（ゆうびんきょく）にも多（おほ）く女性（ぢよせい）が事務（じむ）をとつてゐる。それから銀行（ぎんぎやう）にも女性（ぢよせい）が多（おほ）く働（はたら）いてゐる。それ等は日本（にほん）で鐵道（てつどう）、郵便局（ゆうびんきょく）に女性（ぢよせい）を採用（さいよう）してゐる様に、家庭（かてい）をもつてゐない婦人（ふじん）の仕事（しごと）として何（なん）れも似（に）つかはしく感（かん）ずるのでした。然（しか）し歐洲（おしや）戰爭（せんそう）の終（は）りころでしたが、電車（でんしゃ）の車掌（しやせう）のみならず、運轉手（うんてんしゅ）も婦人（ふじん）でやつてゐたのが紐育（ニューヨーク）にはありました。これを見（み）た時（とき）には私（わたくし）はコレは大變（たいへん）だと思（おも）ひましたね。もうさ

うなるミ服装（ふくそう）から、ハンドルを急（いそ）いでまわしてブレーキを掛（か）けるところなき、まるで男（おとこ）の通り（とお）りでした。彼方（あち）では運轉手（うんてんしゅ）には何（なん）も尋（たづ）ねる事（こと）が出來（でき）ない。尋（たづ）ねることがあつたら必ず（かならず）車掌（しやせう）に尋（たづ）ねる規則（きそく）になつてゐますがそれは重々（じゆうじゆう）承知（せいち）でしたが餘（あま）り異様（いさやう）な姿（すがた）に見（み）惚（と）れて——見（み）惚（と）れてじやない、まあ見（み）驚（おどろ）いて何（なん）だかしらぬが、此（この）女（おんな）運轉手（うんてんしゅ）に聞（き）いた所（ところ）が、「車掌（しやせう）に聞（き）けッ」と一喝（いつかく）を喰（く）はされた時（とき）には、思（おも）はず「ウヘッ」云（い）つて引下（ひきさ）らざるを得（え）なかつたのでした。私（わたくし）は定（ま）めしこれは歐洲（おしや）大戰（たいせん）争（そう）の間（あひだ）、男女（おんな）總動員（そうどういん）の場合（ばあひ）に生（せい）じた現象（げんさう）に過（す）ぎないかと心得（こころえ）てゐます。何（なん）も平素（へいそ）からかういふ風（ふう）に男（おとこ）の事（こと）を女（おんな）の事（こと）と同じ（おな）になつてしまふ必要（ひつよう）は更（さら）に無（な）いか心得（こころえ）ます。

今日（こんにち）叫（な）ばれなければならぬものは神（かみ）の子（こ）としての男女（おんな）同權（どうけん）でありませぬ。今日（こんにち）の婦人（ふじん）はこれ（これ）を叫（な）びつゝ、一方（ほか）には妻（つま）として善（よ）く、母（はは）として善（よ）く、未婚（みこんしや）者（しや）として善（よ）く、女性（ぢよせい）にふさはしき社會（しゃかい）に活動（かつどう）するものとして善（よ）き、何（なん）れになりても神（かみ）の榮（さか）を現（あら）すべき實（じつ）質（しつ）を養（やし）つて行く（い）くのが、婦人（ふじん）の眞（まこと）の勝利（せうり）であると存（ぞん）じます。

【五】 女性運動の新傾向

其處で一方近代の學問を通じて、此女權主義なるものに反對するものも起りました。それは性に關する研究の結果でありまして、男性と女性とは、その性的現象に於て既に相異なる本質を見出すといふのであります。皆様はケネリー女史の「婦人運動と性的滅亡」さういふ書物をお読みになつた事がありませうか。私は今は此書物の内容を精しく御紹介申上げる紙面をもつていませんから、その序文に書かれてゐる一節をこりついで見ませう。その大意は

「婦人運動は性的に男女相違してゐる事を認めず、男子と同じ様な勞働をとり入れやうとしてゐる。妻はこれに反對する、男女兩性はその相違してゐるまゝに妙所があるので、身體にも頭腦にも、性癖にも全然異なる構造になつてゐる男子に適した男子的職業は男子に譲渡して、女子は女子らしい、自然の與へた職分に隨へ」

と、まあかういふ意味の事を云つてゐます。つまり學問が婦人を絶對に解放した様でありましたが、最近の學問は依然婦人は服従するところに本質があるさ唱へる様になつて來ました。

かう云はれて見るに絶對解放を叫んだ新らしき婦人等にも自らの中に、性的に矛盾を感じて來ないわけには参りませぬ。あの青踏社の人々も皆戀をしたり、母になつたりした。戀して見ればさうでせう。愛する男に全身全靈を捧げるさういふところに無上の女としての幸福を感じる。母になつて見ればそこに湧然として犧牲献身の母性愛が現はれずにはゐられない。

さればさういつて婦人は單に男の器になるのだ。子を生む器械になるのだといふ事で覺醒した婦人は満足し得られない。婦人に與へられた使命は男を助け、子を育つる隠れたる働らきに使命があるとして、何故にさうしなければならぬのかといふ倫理的の根底を與へられなければ満足が出來ません。問題は其處にあります。

其處で近代の學問は、たゞ性の關係から、女子は女子らしい自然の與へた職分に從へと命じて、それだけでは思想に悩む近代の女性が倫理の根底として奉ずるに足りません。況んや古來の絕對服從主義の根據を見出す事が出来ぬとしたら、さう解決して女の道を踏むべきか、それが問題であります。

此に我々の信するところに由ると、基督教の思想に由て進むの外は無い。さらばその信仰とは如何、ちよいくと申し上げた點もありますが、簡單に申せばかうです。天地萬物の造物者である神は我等の父である、人類はその神の子である。男も女も皆同様神の子である。そして神様は男には男、女には女、それ／＼貴い使命を與へておいてになる、男が女より貴いといふのではない。男で無ければ出来ぬ事があると共に女で無くては出来ぬ事がある、此點を善く信じなければなりません。此事を信じて人生に立ちます時に、はじめて女性の上に明るい光明が生じて來るのであります。以下女性の問題を考ふるに、先づ母の問題から考へて参りませう。

第二章 母の新倫理

母の新倫理

- 一、昔は孝道の基礎を親の恩に歸した。母親の恩は生みの恩、養育の恩を、山よりも高く海よりも深しとした。近代に於てはこれだけの事で子から尊敬するゝ事が六かしくなつた。
- 二、母親に子を導くだけの識見が必要の時代となつた。専門的の智識は一々子について行くといふ事は不可能であるが、常識に於てはどれだけ子が生長した上でも、母は二十年の長があるべきである。
- 三、母は人格に於て常に子の尊敬を受くべき何者かをもつてゐなければならぬ。
- 四、母としての確信は自ら神の子であり、然して神の愛子を預つてこれを開發するの使命を與へられてゐるといふ、其處に無くてはならぬ。
- 五、自分は母になつたと女の胸が躍る時、嚴そかに神を見上げないではゐられぬ筈だ。それ程親母が神より受けてゐる使命は重大である。

【一】 感恩思想の推移

昔は先づ子が親に對して絶対の尊敬を拂ふことになつてゐました。そしてその理由はいふに、子は親に對して恩があるからであるとせられてゐました。中江藤樹の「翁問答」にかうあります

「孝徳を明らかにせんと思ふには、先づ父母の恩徳を觀念すべし。胎育のはじめより十ヶ月の間、母は懷孕の苦しみを受け、十病九死の身となり、父は孕子の保全、産育の安穩なるべき事をねがひ憂へて、千辛萬苦を心に忘れず、臨産の時至りては母の身はきりさく程の惱みを受け、父の心は煩熱の苦しみを抱けり。幸にして母子安穩なれば一命再續の喜びをなし、母はぬれたるねじきに臥して、子をば乾ける襦にふさしめ、子よくねむりぬれば母の身屈伸をなさず、身垢つきけがれても、沐浴の暇なく、衣裳身のつくろひ等こり亂し、子の安穩を思ふよりほかは他念なし。

もし少しにても病みぬれば、醫を求め神に祈り、身を以て代らん事を思ふ。——人の子の一身、毛一すぢに至るまで、父母千辛萬苦の厚恩ならざるはなし。父母の恩徳は天よりも高く、海よりも深し。」

要するに子は母親に對しては、第一に生みの恩いふ事に感激をするといふ、第二に養育の恩いふ事を感じる、これが孝行の基礎となつてゐる様であります。所が今日に於てはかういふ様に親の恩に感激するものが減じて參つた。生みの恩といふが、私は生んでくれ親に頼んだ事は無い。露骨にいふと親の性慾が、私といふものを生ずるに至つたに過ぎないと、まあ近代の思想を辿るとそんな風に考へて來るものが少なくなないのであります。それから養育の恩といふが、親は子供を愛育する本能があるそれは下等動物でも有つてゐる本能が稍發達したものに過ぎないし、かう考へるに至つては、感激も何もあつたもので無いといふ事になるのであります。

かういふ様な思想を生じた原因は近代思想そのものでありまして、どういふ風にそ

れが生じたか、將來さういふ様にしてこれ等の思想を善導するかといふ事に就ては、私は別に詳述するをしまして、今は母親として子供に對しての考を定めたのであります。孝道を以て本義とする我國に於て、かくの如き言語同斷の考をもつのは以ての外であると、かう吐りつけたゞけでは一向今日の子供には響きません。理屈を云へば成程一理屈ある事で、恐らくその子供を生む爲に生んだものは無いでせう。また育てるのにも本能的に育て、來たに過ぎないといふ感じをする事も無いとは限りませんまい。

其處で少なくとも此生みの恩、養育の恩いふ事だけで、子供に感恩の念を養はしめる事が至難の時代になつたといふ事だけは、現代の事實として認めて置かねばなりません。それで問題は新時代としての母親は、子供をして如何なる點で尊敬の念を拂はしめ得るかといふ點に移つて來ます。要するに今日の母親は、子供を生んで育てたといふだけで無く、實際子供から尊敬を受けるだけの實質を有つてゐなければならぬ

いふ事になるのであります。そこでその尊敬さるべき實質とはどんなものでせうか、私はこゝに先づ三つの點を申し上げて見たいと思ひます。第一に常識、第二に人格、第三に信仰、此三つの點で子供から尊敬を受くる母親で無いと、それは眞の母親と申すことは出来ない事になります。

【三】母性の識見

第一に常識といふ點ですが、私が此處に智識云はすして、常識と云つたのには意味がございませぬ。單に智識を申しますと、子供が多勢ある場合に、どの子供よりも母親が智識に於て優つてゐるといふ事は困難でせう。智識は段々専門的に磨かれて行くからであります。専門的となるに此方一人に向ふ大勢ではやりきれませぬ。早い話が長男は醫師になるといふ。其處で母親は高等女學校にしる、女子大學にしる學校出身の人でも専門になると、自分のやつた生理解剖位では追付かぬので、まあ負けずにや

つて見やうと、生理書を引張り出すのみならず、様々の醫書をひねくりまわすとして専門に學校で研究してゐるやうな事は出来やう筈が無い。それは、まあどうかこうか話し對手になるだけの素養を作るとして、今度は次男が法律をやるといふ、さあ大變、今度はまた法學通論から始めて民法、刑法、國際法と研究をはじめ、その中に三男は理學をやつて天文を専門にやるといふので、また今度は一生懸命に高等數學をやつて、望遠鏡ばかり覗いてゐる、そんな事の出来やう道理はありません。また子供の方でも、そんな風に一々母親が自分等の専門的智識について來ないから云つて、それで尊敬を缺くといふ様なことはありません。

所が常識になると、これは子供が何人あつても、そしてそれがどれだけ成人をした後でありまして、常に母親の方が上にゐる筈です。何故ならば常識といふものは年月が作つて行くからであります。常識といふは何だか新聞や雑誌を讀んだりしてのみ得る智識の様に聞えますが、私はもつと高尚な意味で申してゐます。つまり注意深い修

養が作つて行く経験であります。これは如何なる事があつても子供より母親の方が二十年内外長じてゐるわけでありませう。二十年と申しましても、ボンヤリ過ぎ二十年は何もありませんが、様々の喜び悲しみの中に經て行く二十年の経験といふものは、實に大なる力だと申さねばなりません。

子供が母親を馬鹿にするといふ事があります。それは先づ此常識といふ點に於て母親の注意が足らぬ事が多いと思ひます。小學校時代は子供も母親に對して尊敬を拂つてゐるが、中學校の四五年以上になります。母親の方が餘程しつかりしてゐませんと、子供が馬鹿にします。何か問題でも起つた時「君一つお母さんに相談したらいいだらう」と申しますと「こんな事おふくろに云つたつて始まりませんよ」なぞといふのはよくある例であります。此場合には前に申しました様に、専門的の智識が母親に劣つてゐるといふ意味は含んでゐません、畢竟話しが出来ぬといふは、常識的に子供の問題を解くに不十分な點を感じるからであらうと思ひます。

私は米國の大學にゐて、その大學生等が、誰も一樣に自分のお母さん程偉らしい者は無い様にいつて、お母さんの自慢話をやるのを、何時も美しくしいと思つて聞きました。私のゐました學校は總合大學でしたから、生徒は皆カレッジを卒業したものの計りで、相當に年が長じてゐるのでした。それが皆お母さん〜と言つ、話す。それは單に僕の母は私を生んでくれた、そして私を育て、くれたと、その點でのみ敬意を拂つてゐるのではないは勿論でせう。それは母親自身にその恩恵以外に子供から尊敬を受くべき實力を有つてゐる爲にいはねばなりません。事實私は彼地に於て、多く母なる人に接しましたが、未だ嘗て子に對して權威を失つてゐる母に會たことはありませんでした。その子供に對して有してゐる母の權威の一つは、即ち此常識といふことで、もつと力ある言にするに、母親は凡ての事に對して一かごの識見を有つてゐなければならぬ、それが子をして母を尊敬せしむる有力な材料であると思ひます。

これ等の代表的女性にして、私はスザンナ、ウエスレーを挙げたいと思ひます。

十九人の子供を生んで、これを善く育て、行つた彼女はまことに母としての典型的人物でありました。彼女が貧しいエボースの家で、厳しい秩序の中に子供を教育して行つた歴史は實に天下の壯觀であると思ひます。彼女から色々教へらるゝ事を共に考へて見たいと思ひますが、今申上げてゐる範圍では、彼女が常識に富んだ婦人で、立派な識見を何事に對しても有してゐたといふことでございませう。

メソヂスト教會の開祖であるデヨン、ウエスレーは此スザンナの生んだ子供の一人でございませう。デヨン、ウエスレーは此母を深く尊敬したものでした。單に少年の時だけで無く、終まで母が彼の最良の相談相手でございませう。デヨン、ウエスレーは實に十八世紀宗教界の偉傑でありました。そのウエスレーが、思想上の問題に悩んだ時も、これを母親のスザンナに打明けて相談してゐます。これに對し彼女の與へた解決の如き、實に堂々たるものです。何も深遠な専門的智識から出たのではありませうが常識の圓熟した識見であるといふことを認められるのであります。

或日デヨン、ウエスレーは、一青年信徒が説教をしてゐるのを見ました。その當時の制度では信徒が説教をすることは出来ないことになつてゐましたので、流石偉人のウエスレーも此事に就ては非常に悩んだものでした。彼は心を亂して歸つて來ると母親に相談をいたしました。その時母は靜かに答へました。

「デヨンよ、汝はその一青年のする事に深く心を止めねばなりません。彼も亦汝が神様の召を蒙つた様に、福音を説く使命を感じてゐるとすると。——彼の教ふるところを聞き、そしてさういふ結果が生ずるかといふ事を見なければなりません。そして汝自ら彼の教ふるところを試みに聽いて見るが善いでせう。」

ウエスレーは唯々として母親の言の如く、一日その青年の説教を聽いて見ました。ところが中々立派なもので、たしかに神の御用をつとめてゐるのだといふことが分りました。

「主が彼をして語らしめ給ふのだ。主よ彼をして彼の善しむするところを語らしめ

給へ。」

こは彼が心に叫び、それを自ら發表した意見なのでございました。

スザンナは一方デヨン、ウエスレーに對する善い相談對手であつた計りで無く彼の長兄に對しても同様でした。長兄はデヨンのやり方が彼の信する傳習的教會の規則に反するから云つて、常に彼に反對の態度をとつてゐました。その度毎に長兄は母のスザンナのまごころへ持ち込みました。それに對してその折々に母のスザンナの答へたのを見ると實に立派な識見で、たしかに時流を抜いてゐるのが分ります。

スザンナ、ウエスレーの手紙の文句を読みますこいかに飾り氣の無い、然し整ふた立派な文章になつてゐます。そして内容はいかにも常識と愛と敬虔に満ちたもので一讀敬服の念に満されます。彼女は常にこれを行先々の子供等に送つて子がどれだけ成人しても、彼等の最良の相談對手となつてゐました。

かういふ例から日本の母親なる人々に對して多少の注意を促がすこは無禮にはな

らないか存じます。今の母親は、子供を育てるのに、その健康には家庭に於て非常によく氣をつけるが、教育上の事は學校の先生に任せてしまふといふ弊がある。それもまだ中學校なり、高等女學校なりの間は、教養のある母親は智識の上でも相談對手になる、然し高等學校から大學校に入るこいふことになりますこ、もう母親の勢力は此方面には及ばないものとする様な風があるのであります。こころがこれは非常に間違である。此講のはじめの所で申しました様に、専門的の智識では子供のそれぐに追付いて行くこは出来ませんが、常識といふ上からは母親の力が何時迄も上でなくてはならぬこであります。其點が缺けてゐる原因は多くさういふこに不注意であるこいふ事にあります。早い話が息子が上京して遊學し、母は郷里にゐるこする。専門教育は大學で受けてゐるが、やはり重要なことになると、其唯一の相談對手は故郷の母であらねばなりません。母親はまたその自覺で常に都にある息子を導いて行かねばならぬのであります。たとへば折々母親が手紙を出すこする、それは子供が大なる

カミして保存するだけのものとして書かれねばならぬと思ひます。然るに息子一人ならばともかく、家には乳呑児さへあるにいたつては、中々手紙を書いてゐる暇もない、書きかけるに傍で子供が泣くといふ様な事になります。自然手紙を書くにも粗末になる「まあ彼れの事だから」なき、書きなぐつたまゝに郵便函へ入れるといふやうな例は少なくございません。これは皆様方の中には無い事でせうが、或一部分には手紙を書くに一寸字を忘れた、然し言海を引張り出すも面倒、え、子供のころだ推量して読んでくれるだらうなき、怪しい文字のまゝに書いて置くといふ事なき一本の手紙の中に一つや二つある人は珍らしくございませぬ。書損をしてもそのまゝ文字を消して書いて行くといふ様な、さういふ手紙は「おい僕の母からの手紙だ。」と曰つて友人に見せるにはどうも工合の悪いことであります。こゝらはたゞ注意のしやうでござうにもなることでせう。子供が多勢あるといふが、スザンナ、ウエスレーは十人の子供を生んで、それを一人々々根氣よく導いたものであります。例の息子への

手紙に間違つた字、書き損ねたまゝの手紙を出す母親でも、もし今の良人と一所にならない中に——ちと妙な例になるか存じませんが、婚約の間とか何とかといふ間に書く手紙だつたらどうでせう。決して怪しい字を書きましますまいし、書き損ずるに何邊も何邊も書き替へて、一本の手紙に巻紙一本到頭使つてしまつたなどはよくあることです。然るにその人が子供に對するに、前に申しました様に不注意にする、これがどうも宜しくないことで、もつと子供に對する母親の責任が重大に考へらるゝ様にならねばならぬと思ふのであります。

【三】母性の人格

次の人格といふ問題をしばらく考へる事に致しませう。さて前にも申しました様に、今日の母親は、生みの恩、養育の恩といふ事だけでは子供の尊敬を受くるわけに参らなくなりました。さらばさうして子供が母を尊敬する

かこ申しますと、今日に於ては母親はその人格に於て、子供が敬服するだけの何ものかをもつてゐなければならぬ筈であります。一旦自分が人の母となつたとき知つた時、親も厳肅に自分を顧みないものは無いかと存じます。母たるが故に益々人格高からずしてはその責任が盡されません。今日の子供は無暗に叱つただけでは服従しない。母親の人格上に弱點を見出すと、どうしても子供が尊敬をしないことゝなります。短氣な性質、機嫌のよい時は馬鹿によく、機嫌が悪いと悪くなる馬鹿に悪いといふ様な婦人、無責任の事をいふ人、子供に對してよくいふ事が間違つた人、口に出して置いて實行の伴はぬ人、皆子供はさういふ様な事があるを母を尊敬いたしません。それは單に一二の例に過ぎないので、母親としては常に子供を心から敬服せしむるだけの、人格的の力を自分で有たねばなりません。

そこで米國に於て大學生が自分のお母サン程偉いものは無い様に云つてゐるといふことを前に申しましたが、少なくとも母親が子供に對しては拙いところを見せてゐない

と私は常に彼所で感じました。或時は南カロライナ州のウエスト、ミンスターといふ地に招かれました。一日の聖日を説教に参りました。其處のメソヂスト教會の牧師サンはルイスといつて、實に吃驚する様な大男でした。六呎六インチといふ、私も大分背の高い方だと思つてゐましたが、此人と立話をする時には、見上げる様にしなればならぬ位でした。此人は教會を六つもつてゐて、一つの日曜に三つの教會を自動車で廻るのでした。私はその一つの日曜の役目を果しまして、翌日の午後立つて學校に歸つた譯でしたが、その月曜の午前の事です。朝食がすんで客室に二人話してゐたが、時計が九時を打つと、その大男のルイス君、

「コンドウ君、一寸失禮をしますよ。遠方のお客サンに對してすみませんが、毎週此時間は大切な時間ですね。」

さいつていそぐ出で行つた。暫らく書齋の方でタイプライターの音がしてゐた様だつたが、三十分もしてからでしたらう、ニコノとして歸つて来て、私にかう申しまし

た。

「實は毎月曜日の朝九時に、僕はお母さんの所へ手紙を書く様になつてゐるのでね、これは僕にこりて最も楽しい時間ですよ。」
 私はそれを聞いて、その雲突く様な男ご、お母さんいふ言がこかく不調和である様に感ずると共に母と子との美しくい關係を涙ぐましい程に美しく見たのでありました。そして暫らくルイス君の母親崇拜談を聞きましたが、成程さうも行届いたものだと思ひせざるを得ない事が多かつた。それは實に此母君の有してゐる人格の富が生んだものとしかおもはれません。

私が在米中自分の家の様にしてゐた、ブラウニング氏の母君の事を思つて見ましても、實際感心する事が多くございました。私は年若い母親よりも、年老ひし母親の態度から一層強い感激を與へられるのが常でした。由來日本では老年の母と今の若い者との間には、非常に思想上の差がありますから、老人が「昔は」とか「妾の若い時分に

は」とかいふて、今日を批判しますとさうしたきて、調和しない事が多いのですからどうも年を老つた母親で物のよく分る人が少ない。處が米國の母親にはまあさういふことのない爲か、ともかく年を老つた婦人に、如何にも物の分つた、新時代の氣分を呑み込んで若い人を導いて行く、それは立派な人があります。これ全くその人の人格の然らしむるころこ私は感じたのであります。

母親として人格をもつて子を導かねばならぬといふことは、必ずしも基督教にのみ由るこごではありません。東洋に於ても同じこごであります。孟子の例なきが善い引證であります。孟子が勉強しはじめたのは、彼の母にありました。孟子が學問を中絶した時に、母は自分が今まで織つてゐた織物を絶ち切りました。それを見て驚き呆れてゐる孟子に向つて「おまへが學問を中止するのはこれと同じだ」といつて教へたといふことは有名な話です。「古列女傳」の中に現代から見ても興味のある孟子の母の例が書いてあります。或時孟子が自分の妻の室へ突然に入つて行きますと、女は肌を脱い

でりました。孟子は立腹して、そのまゝ出て行きました。女の方もさるものであつたと見わたして、孟子の母のミころへ来て、暇をくれミ申しました。

「妾聞く、夫婦の道は私室に與らずと、今者妾竊に墮りて室に在り、然も夫子妾を見て勃然として悦ばず、これ妾を容るる也。婦人の義蓋し客たらず、宿として請ふ父母に歸らん。」

中々理屈を曰つたものです。然し孟子の母は此事を聞くに、孟子を呼び古書を引いて教へました。

「それ禮に將に門を入らんとするや、聲必ず掲ぐ、人を戒むる以所也。將に戸に入らんとするや、視を必ず下す、人の過を見ん事を恐るる也。今子禮を察せずして禮を人に責むるは亦遠からずや。」

これには孟子も參らざるを得ませんでした。妻の室へ入る時でも、必ず戸を叩いて入る西洋の習慣に、同じ禮法を孟子の母は支那で曰つてゐたのでした。眞に子供を畏

服せしめやうとするには、一かどの見識に人格を有たねばならぬといふ事は此東洋の一例でも分ります。

【四】母と信仰

私は先に母親は常識といふ點に於て、子供がどんなに成人した後でも子供より一歩上になるなければならぬといふことを申しました。それは常識は年月が作つて行くからだといふ意味でございましたが、信仰といふ點に於ても同じことであるに存じます。それは信仰と申しますものもそんなに一朝一夕に出來上るもので無く、長い年月に鍛へられて行くものであるからでございます。

まあ、それはさもなくとも信仰といふものは一體どういふものかと、その點から考へて參らねばなりません。話しが少しく理に落ちますけれど、信仰といふ言はいろいろに用ひられてゐますので、私共が信仰と申してゐるのはさういふ意味であるかとい

ふ事を、少しく申上げて見ませう。普通信仰に申しますと、何でもよいからただ信ずる心があるといった様な、至極どうも漠然とした意味に用ゐられてゐます。所が基督教では其處をはずりつきりするものでありまして、即ち前に一寸申上げかけました様に先づ天地萬物の造り主なる神様を信する。それは信念の爲でも何でも無く、實際有るから信するの外は無いのであります。我々人間が此神様の子であるといふこと、即ち私共は此世だけに無意味に生きてゐるといふのでは無く、此世に於て神様の御用を つとめてゐるので、その神の子たる生涯は永久に滅びない、もつと明らかに申します、死んでから後までも、身體は灰になり土になるが、此神の子たる靈魂は記憶をもつたまゝ、神のみもこに行くのであるといふ、これが信仰でございまして信仰の極意はかう確信するのみでなく、それが實際の生活の中に現はれて行くことなのであります。即ち母としての問題から申します。此我は神の子である神より母たるの使命を與へられたといふ、此信仰に由らないでは母としての眞の自覺は得られない、かう私共

は信するのであります。

此頃は、子供の方から考へて、生みの恩といふ事に就て昔の様に感激の心をもたなくなつたといふことを前回に申し上げましたが、母親の方から考へても、生むといふことに昔の様に單純には考へられなくなつたことも申されます。神様が與へて下さつたのだといふ。此信仰に立たないで、後から後へと生れて來る事に對しさういふ考を立てるか、ただ夫婦になつたら子供の生れるのは、さうも止むを得ないことだといふだけの考へしかもたないとする、生みたくなき思つたら、生まない方法をこゝろに考へた様なことになる、それではつまり生むといふことに感激は生じないといふことになります。それ故子供が生れるといふ事實に對してそれは神より與へられたのだといふ信仰に立たないでは、此事を正しく考へる途は無いと申さなくてはなりません。

エルヴェーの劇に「炬火おくり」のといふものがあるのを御承知でせう。信仰なくて、母さといふ境遇を自ら感ずるとしたら、此炬火おくりの生涯だと思ふ人はありますまいか

此「炬火おくり」といふ劇はフォンツネー夫人といふ老寡婦と、その娘のこれも寡婦になつてゐるサビーヌ、そしてもう一人その娘であるマリー、ジャンヌと此三人の女性を捉へて、所謂順送りに女としての運命を移して行く、母子の問題を取扱つてゐます「炬火おくり」こいふ言葉の意味はサビーヌにマラヴオン（後にサビーヌの娘の婚になる人の父）が話しをしてゐる會話の中に出て來ますね。

「あなたは多分「炬火おくり」の話をお聞きになつたことはありますまいな。それはかうなんです。アテネでお祭をする時に、市民が集まりましたな、かうお互に間を置いて列を造る、まあ一寸鎖のやうな形になるのです。それから一番始めの者が祭壇に炬火を點じてそれを次の者に渡す爲に走つて行く、そしてそれがまた、三番目に渡すこいふ具合に、手から手に炬火が渡つて行く、各々は決して後を見ないで、ただ次の者に火を消さないやうにして渡さなければならぬこいふことばかり考へながら走るのです。さてそれを渡せば、そこに止まつて今度は遠くの方から漏れて來

る神聖な御光を見守りながら、さうする事も出来ない不安に胸をおさらせて祈願を罩めるのです。その「炬火おくり」の中に人類の時代の姿を見る事が出來ます。それは私がいふのではない、わたしの古い友人、ブラトン、善良な詩人リュクレスが言つた事です。」

こある、その言の中に全篇の鍵がありますでせう。つまり母親は子供の爲に全部を犠牲にする精神があるが、子供の方では一向それを有難くも感じない。己が欲するまゝに生を望まうとする、所でその子供も長じて自分が母親になると、子供に自分の凡てを献する心になるが、子供の方からは同じ取扱を受ける、そしてただ順送りの生涯を送つて行くこいふことが、つまり「炬火おくり」なのですな。サビーヌにはスタンジ―こいふ想人があるが、子供のジャンヌの爲に、その愛を拒むこいふ、作者は大分あそここ力を入れてゐるやうですね。サビーヌがスタンジ―への言、

「まあ聞いて下さい。あたしは娘の爲にかうしてこの世に生きてゐるやうなもので

すからね。あれの初な心は、まだ物事をよく判断する力も出来てゐません。それで今突然あれの眼の前にあなたさいふ、いはば競争者を連れて来ようといふあたしの望は、さうしても断たなければならぬだらうと思つてゐたのです。あたしの心を二道に分けるさいふ事を明らかに知らせる事がさうして出来るでせう。」

結局かういふ考で、今は初な娘が自ら結婚をするやうになつたら、その時は自分等が結婚し得る時であるさうしてしまつてゐる。スタンジの方はその事は待てないで思ひ切つて米國へ渡つてしまふのです。

「私の最後の言葉はかうです。私はあなたを得たい。然しもう待つのはいやだ。」

かうして彼女は娘の爲に自分の幸福を棄て、しまつたのですが、娘のジャンヌはその時既にヂヂエと結婚の約束をして、母の思つてゐたやうな初な娘ではなかつたのでした。そしてヂヂエと娘と結婚する、ヂヂエが財産を失つて金に困る、娘は母をして金持であつたスタンジに助力の手紙を強ひて書かせる、サビーヌは病氣になる、嫁

養先で偶然スタンジに會合する、その時は既に彼は立派な妻を娶つてゐる、スタンジの世話で、ヂヂエは米國に嫁ぎに行く事になる、娘は病氣の母を棄て、行く事はあるまいと思つてゐる。「あたしヂヂエと一緒に行くのよ」言つて母を棄て、行つてしまふ。それ等の場面を一々紹介する必要はございません。その別れの愁嘆場にサビーヌが娘に、

「お前を生み落してから二十一年この方、二人の身體はやつぱり一つのものだと思つてゐた、それだけお前と離れるのが辛い。お前をいとしいと思ふその證據には、お前を生んだあの苦しき、それ以來、夜晝なしの心づかひ、小さければ小さいにつけ、大きくなれば大きくなるにつけ、お前の悲しさうな泣き聲が丁度お前が生れた時のやうな苦しき身願ひを、その度毎にあたしのお腹の底に傳へたものだ。——」

と、かうして病母の嘆きに對し、

「母さんお願ひだから、あの人に楯つくのはよして頂戴ね、ヂヂエはあたしの夫よ」

「言つて出てしまふところで終つて居ます。話が横道に入つた様ですが、かういふ所謂炬火おくり、母から子へと同じことを繰返して行くだけが母の運命だしたら、實際考へやうに由つてはつまらなく思はずにはゐられないでせう。」

實際今日の多くの若い婦人達は、學校に於て科學的の教育を受けてゐるわけですがその科學的の立場から人生のいふものを見るに、無神論的進化論の思想に歸つて來るの外はない。人間はただ盲目的の理性に由つて繰返されて行く自然の一現象に過ぎないのであるか。さうするにつまり母親が子供に對する愛情も犠牲も、進化の法則に由る母性の本能に過ぎないといふことになる。そしてその本能を繰返して行く、それがつまり所謂「炬火おくり」の行列のやうなものだと思ふ。私は親子の關係程はかないものは無いと思ひますよ。實際娘さんを澤山もつてゐらつしやる方なき見ますに、さう思ふことがあります。あゝしてまあ可愛がつてお育てになつて、教育費にしても衣類調度の費用にしても大したものだが、そして終には他人に與へてしまふわけ、考へて見

ればつまらない氣もするでせうと。然も母親になるに何が一番苦になるかいつても娘の縁が遠いといふ事程苦になるものはない。妙なものですな、成程これが母性の本能といふものか、そしてその娘も母となれば同じことを繰返す、本當に「炬火おくり」の様なものだと思はずにはゐられない。所が人間は皆神の子であるといふ、そして母親は母親としての重大な任務を帯びてゐるといふ、吾人の結論に來ますと、決して母親の生涯は炬火おくりの運命に支配されてゐるのでは無く、驚くべき使命を荷ふて御用をつとめて行く事を感じるのであります。

【五】 母と子

先づ實際的に此に一人の母親に子供が生まれたと假定しますそしてその生れた子供が成長して行くといふ一段になりまして、凡そ世にこれ程困難なことは他にございませうか、私は親をして今日の子供を神よりお預り申してゐるといふ信仰が無かつたら

さうしてその任に堪へて行く事が出来るだらうと、それを不思議に思ふ位でございませう。

此に子供が生れたる、その身體が日にく生長して行く計りでない、その知識は日増に加はつて行きます。性質も次第に造られて行きます。此純白な子供の心には、されだけ強く周囲の境遇が影響することとございませう。孟子の母が子供の爲に三度家を移したといふことは有名な話であります。孟子の母は實際偉らい人物でしたから、それで成功したのですが、母親そのものがつまらなかつたら、たゞへ家をされだけ變へたところで、だめでございませう。何と申しましたも子供にとつて、母親から受くる影響程強いものはありますまい。ここに赤兒の時から物心のつくまで、それは殆ど全部が母親の勢力のもに育つて行くといつて宜しいのだから、母親の思想、性質、言語、行爲それ等の凡ては白紙の様な子供の心の中に染みこんで行くわけでありませう。が、さう考へて見るに、私のありのまゝの心、行爲、それをそのまゝに寫しさへすれ

ば完全な人間が出来るに、さう信じ得る人は何人あるでせう。心ある婦人は母となつて、始めて本當に自分といふものを省みるといふ程のものであらうかと思はるゝのであります。

此で最初に一寸申上げました私共の信仰といふことを考へねばなりません、母親が子供を育てる際に有つといふ信仰は悟りとか修養とかいふものに立てられてゐるもので無くて、神様に由て子供を育て、行く、その確信を指すのであります神様が確かにあるとしたら、母親自身もそれを信じ、三歳の小兒にもそれを信ぜしむることの出来るもので無くてはなりません。佛教の悟道は大人には出来るであらうが、三歳の小兒に佛教の眞意を悟らしむることは出来ませう。けれども目に見えざる天地の主なる神を子供に教へることは出来ませう。それも教育の爲の方便として用ひるにいふことは無意味でございませうが、確實に存在する神様の事を幼少の時から發見せしむる神様がある以上、此は兩親の責任でございませう。

其處で母親が子供を教育するに當つて、自分といふものを標準にしないで、神様を標準とし、神様に子供の心をひきつけて育て、行かうとする、これが私共の教育法なのでございます。此立場に立つてこそ母としての心強さを感じるこゝが出来るのであります。それには母親に眞の信仰が無くてはそれが事實に現はれません。私はよく米國で母親が小さな子供を夜寝せつける時の事を思ふ度に、こんな美しい繪は無いと思つた事でした。まだお祈りの言葉を出す事の出来ない子供に代つて母親が祈る時の姿であります。眞白な寝衣を着せて寢床の上に祈りの姿勢をとらせる、母親はそのベッドのもとに跪づいて、子供に代つて祈つてやるのであります。

「神様、今日一日あなたに守られて安らかに過ごしたことを感謝いたします。そして今から眠らしていただきます。今夜寝てる中にもし神様の傍へ召さるゝこゝがありませんでしたら。明日の朝起きてあなたと共に一日を送るこゝを得させ給へ。」といふ様なことを祈る。母親はその時形式に祈つてゐるので無くて、心から活ける天

の父に愛兒に代つて祈つてゐるのであります。子供は自分で口は開きませぬが、寢床の上で頭を下げ目を閉ぢて母の祈つてくれる祈りに幼ない心を合はしてゐるこれ程貴い有様が他にありませんか。それから母親は子供の好きさうな讃美歌を唱つてやつて寝せつけるのであります。かうして育てられて行く子供の中に幼ない時から、神を父とする信仰を養つて行く、此背景は前回申上げました様に米國で母親に對して養育の恩といふこゝ以外の尊敬を拂ふ理由の一つが其處にあるのでは無いかと思はれます。米國の讃美歌集を手にしますと、これにも「母の歌」三つが數個入つてゐないものはない。それ等の多くがされだけ頑固な人々の心を柔らかに神に結びつけたこゝでせう。私はこれを書きつゝアトランタの作曲家兼聲樂家のテルマン氏の作つた「我が母の聖書」三つを思ひ出さずにはゐられません。私はテルマン氏と心安くしてゐたところから、彼地の集會でよくその歌を唱つたりしたものでした。

「親しく貴き書物、」

その色今は褪せ、古くなりたれど。

思ひは有りし日の樂しさに歸る。

我は母の膝の上に立てば、

母は我頭にそそ手を置きて、

優しき聲に聖書の物語聞かせ給ひし日。云々

これは母が兒の幼少の時から、聖書を教へては神様のお話しをした。それが心に残つて誘ひ多い世に光明を失はなかつた物語を歌つたものですが、その他幼なき折母親から受けた様々の印象は、しばし神を忘れて暗黒の世界に放浪した流離子を昔の信仰に歸らしめたことをよく歌つたのがありますが、それは歌の材料であるといふ計りでなく、眞實な地には日々起る出来事なのでございます。

教友日野原牧師が米國を了へて英國へ渡らうといふ前夜、ボストンのコモンズといふ公園で賊に出逢つたのを「母」といふ言葉でその難を脱れたといふことは有名な話

であります。その夜氏は千弗の金を懐にしてゐた。それは歐洲を経て日本に歸る旅費で、もしそれを失つたら、また數年米國でやりなほさねばならぬといふ大切な金でした。所がそれをどうして知つたものか一人の賊が、夜の淋しい公園を散歩してゐた日野原氏を呼び止めた。賊は右の手をポケットに入れつゝ、有金を皆出せと迫つたといふのです。これはもし金を出さなければ、殺してしまふといふ意味で、賊の手はもうピストルにかゝつてゐるのでありますから、氏の運命は進退谷まつたわけです。然し日野原氏は騒がないで、賊に

「君はお母さんがおありですか。」

と尋ねた。賊も一寸面喰つたでせうが、仕方がないから「有る。」と答へた。「何處にゐるか。」と尋ねられて、コンコードといふ二十哩計り隔たつたところにあると答ふるの外は無かつた。そこで日野原氏は、自分にも老ひたる母があること、然しそれは數千哩彼方の日本にあつて、此五ヶ年間明けても暮れても自分の歸つて來るのを待つて

あること、自分もまた五年の星霜を、相見ることの出来ぬ母にどんなに憶れて暮らしたかを彼に語り、一時間計りで直ちに母と相會し得る彼の幸福を羨み、その上に彼が金を渡せと迫るのも、何かの必要の爲であらうから、その必要なだけと與へることで許して貰ひたいといふ意味の事を語つたといふ。所が母の話をしてゐる間に、その賊の顔には次第に紳士らしいところが見えて来て終に彼はピストルを握つてゐた手を離し、そして日野原氏の手を固く握りつゝ、別れを告げて去つたといふのであります。私は此話を承はりましても、その賊といふのは生れながらの悪人でない、様々の生活にもまれてさういふ烈しい墮落に陥つたのでせうが、彼の背後に母の力のあることを思はずにはゐられません。此男なぞ實によく母の歌の中にある模倣でありませう。母といふことを云はれて彼の心に起つて来たものは、その幼なく潔かりし時に、母から受けた真理の教育であつて、それはふと本心に立歸らしめずしては置かぬ程に力強いものであつたらうと思ふのであります。

母が信仰深く子供を育て、行くといふ事は、さうした人生を踏み外づしてしまつたものが、昔に歸つて来るといふ例にも現はれますが、一層多く誘惑の強い青春時代を母の力の爲に人生を踏み外さずに濟んで行く、その方面にはその例は數限りなく現はれてゐるのであります。さういふ例を今此に一々擧げるは却つて煩らはしいでせう。母親がそれ程に子供の人生の力になるといふことは信仰に立たなければ不可能であるといふことを今は考へたいのであります。神を信じないで、何を標準に育て、行くかといふことに歸つて、私の如くなれと云ひ得ないのであつたら、何を理想に子供の一生をすゝませやうとするのでございませうか。これは相當な家庭にもよくある例でございませうが「偉らしいものになれ。」「々々」いつて子供を勵まして行くものがあります。所で此「偉らしい者」といふ言は何を意味するでせう、畢竟何か一かどの立身出世をするといふことを意味するのであります、それは必ずしも悪いことではございませぬ、然し聖い理想を抱いた上の立身出世でなくてはならぬ、もし大理想を立てずして

必ず人を驚かす程な立身出世をせねばならぬといふことになり、それに成功した時は善いとして、思ふ様にならなかつた場合は大なる失望となるわけであり、何れ有数の成功といふことは少数者のみ得らるゝことですが、それぢやそれ以外のものは皆偉らくないのでございませうか、さう思ふて失望せしむべきでせうか、此處が神を信する立場では違つた考に立ちます。神を信じたら何もかも神の御旨といふわけで卑屈な考になるといふ譯は勿論ありません。然し大臣宰相になつたから、富豪になつたから、大學者になつたからといふだけで、眞の成功は思ひません。世の中は大員だけでやつて行けるものでも無い。もつと人生に根本的のこころは善い人間となることと、立派な人格者となることです。立派な人間さへ出来たら、大臣になつたら立派な大臣になりませうし、野にゐたら立派な民となる、母親として育て、行くには、偉らしいものとする前に立派な人間になれといふことを高調せねばなりません。さあ、そこになるこまたその立派な人間といふことは何を標準に教へたら宜しいか、そこで

依然問題は神様といふことになり、神様を信じ、人間は悉く神様の子であるといふ、これが私共の信仰であります。母親から見ますと、それは自分の子であるといひ條、實は神様から預つてゐるのである。神の子たるイエス様の御幼少時代をマリアといふ清い婦人がお預りしてお育て申したといふ——それは種類を異にしてゐることは申せ、凡ての母親は神の愛子たる人類を抱いてこれを育てるこいふのですから、これは實に世界最大の貴い責任と申さなければならぬ譯であります。かう自覺をしましたら、さうして自ら神を信するの心深くなくして此責任が果されませう。此意味に於て女が人の母となつて敬虔な心を起さない程無意味なこころは無いこ私共には思はるゝのであります。

さて此信仰に母親が立つこいふ事に由て、子供の敬虔心が養はれて行く、此處を考へましても、子は母親が形式的の信仰をもつてゐるこか、子供を叱る時だけの方法に神様をかつぎ出すこかそんな事でしたら勿論承知しやう答がございませぬ。子供の敬

虔心を導いて、その子をして一生誤まらしめないだけの、母親の信仰は、それは本當に一生懸命のもので無くてはならないのであります。

これは人から伺つた話ですが或る地に於て、子供の出来が悪くて、その爲に非常に悩んでゐる母親があつた。それを或都會の牧師さんに頼んで、どうぞあの子の性質を直していただきたいと願つた。その都會で學校に通つてゐたその子を牧師サンは時々招いてはいろいろと教示した。然し中々性質はよくなりませんでした。母親は非常に心配して、熱情の籠つた手紙を牧師サンに書いて、私は子の爲に絶えず神様に祈つてゐるこいふことを申されました。それでその牧師サンが一日その子を招いた時に、故郷のお母サンは君の爲に日夜神様の前に祈つておいでになる、それを思つても君は生活を改善せねばならぬこいつた時に、その子は言下に、

「先生それは嘘言です。」

こいつたこいふ、何故ご問ひかへすと、

「私の母は信者ですけれど教會へも餘り出ないし、母が祈つてゐたところを僕は見たこいがあるません。」

こいつたこいふ話でした。そのお母サンは善い方ではあつたでせうが、信仰こいふ點に於て、子供からさう曰はる、だけの程度のものであつたこいするこ、そこに此子の人生を踏み外した原因があるとしたかおもはれません。これは全く恐ろしい話ではございませうか。

十八年間子の爲に祈りぬいたこい云はれるオーガスチンの母モニカの信仰は、さうしても何時かはアウガスチンをして、あの聖者こせずには置かなかつた。

或時インガソールこいふ有名な無神論者の演説會があつて、それを聴いて歸つて行く二人の青年がありました。その中の一人は申しました。

「僕は今夜こいふ今夜は全く自分が今迄信じてゐた信仰の空虚なものであつたこいふこいを知つた。本當にあの先生のいふ様に、神なき、いふものはあるもので無

い。」

と、ミころが今一人の青年は肅然として申しました。

「いや、さうでない。僕はさうしても神様はあるこいふこを信する。」

そこで友は、

「何故だ。」

と云つた。するこ

「僕のお母サンの信仰に現はれてゐる神様を打崩す事が出来ない。僕のお母サンが日夜信じてゐるあの神様は生きてゐらつしやる。僕は理屈はいつでもあの神様を拒むこが出来ぬのだ。」

こ申しましたさうです。さうです。その母の信じてゐる神、その神に對する敬虔な態度、それが子供の中にしみこんで行く、それは決して空虚のものではあり得ないのであります。

一番始めの問題に立ち歸つて來まして、信仰こいふものは一朝一夕に磨かるゝものではありませんから、常識こいふ問題で考へました様に、信仰こいふ點に於ても母親は必ずその子よりも二十年の長はある譯ですから、此點に於ては學問こ専門的の數養こかいは事は子より劣りましたも、此信仰の一點に於ては母は子に優つてゐなければなりません、子が浮世に出で、様々の荒浪にもまれる時、たゞ母親の暖かい愛の中に安全地を見出す計りでない、母親のその深い信仰の宗教に來ていつも靈訓を得て再び人生の戰場へ出て行くこいふ、其力が母親にあつてこそ、母は何時迄も子を導くものであり得るこ信するのであります。

まだ自分の子を自分の膝下に置く時は善いこして、子が成人して大都會に遊學するの時機に達しました折、故郷にある母親はその誘惑の多い都塵の中に自分の愛兒を置いて、如何なる確信を以てこれを安んずるのでありますか。私は或日京都から神戸まで汽車で参りました時に、大阪の驛で妙な光景を見ました。何でも田舎から大阪へ勉

學に來てゐる中學の上級生らしい青年のミころへ國元の母親が訪ねて來て、一日を共に暮らした後、母親が國へ歸るのを青年が驛に送つて來たところらしかつたのでございませう。汽車がもう出るといふ前、母親は窓から首を出して、外に立つてゐる青年に向つて懇々論じてゐるのです。私は丁度その傍に座席をみつてゐましたので、聞くこともなしにそれを聞いたわけなのです。母親はかう申しました。

「いゝかへ、身體を大切にな、そして何ぢやぞえ、夜なんかは外へ出ない様にすることが善い。出れば碌なことは無い。家の中にあるのが一番無駄が無い。日曜日でも、なるべく家の中にある様にすることが善い。」

青年は碌にそれを聽かないで、彼方向いたり、此方向いたりしてゐました。これは此書の讀者の方などには縁の遠いことでせうが、私はその時本當にさう思ひましたね。さうも危いかなだと。今日の若いものに日曜日にもなるべく外へ出るな、誘惑に出逢はぬ様に家の中へ引込んでゐるさ、さう云ふことでさうして納まるものですか。

實際子供を都會へ出して置くこと程危い恐ろしい事はございませぬ。さうしてこんな事で今時の若い者を正しい道に導いて行く事が出来ませう。それは何れ無教育の母親だつたのでせうが、それじや教育のある母親だつたらどれだけ子供に對して安心がしてゐられるのでございませう。やはり神様を通じて立て、行く考でないと、程度こそ違へ、不安は同じことである筈でございませう。

それで結局母親は自ら信仰深く、神を信じて神よりお預り申した神の子たる子供を立派に神の子として育て、行かうといふ、聖い大望を起すに至らねばなりません。そして色々の鍛錬の後に、本當に子供が信頼して動かさるゝミころの信仰を母親がもたねばならないのであります。

教會に出てゐる青年で、お母さん〜ミ、よく母親の噂をすう人は私は一の安心をもちます。また學校の休みには待ちかねて母君のゐます故郷に飛んで歸る青年には更に大なる安心をもちます。進んで凡ての出來事に母親の識見に判断を求め、その人

格を慕ひ、その母親の信仰に由て暖められてゐる青年を見ます。これこそ大丈夫、
打棄て置いても決して心配の要らぬ青年だ。さう思ひます。安心の出来ないのは此反
對の位置にゐる青年であります。さう思ふに、母たる人々はピンと身體が引締る様な
思ひをせずにはゐられないで存じます。
かういふ問題は女性にまつて最も必要なものであると思ひますから、更に章を改めて
申上げることに致します。

第三章 母性と子女教育

母性と女子教育

- 一、アレキサンダー大王の母は心から彼を愛した。然しそれは本能的の愛であつた。ナポレオンの母は賢く彼を愛した。然し惜しいかな信仰の人では無かつた。
- 二、母は子女教育に苦心をする、然しその多くが、子供の教育、徳育、徳育の方面から考へるのであつて、宗教々育といふ點には考へ及ぼさない。
- 三、子女教育の中心點は靈育にある。スザンナ、ウエスレーの最大成効はそれであつた。彼女の子女があらゆる人生の試練に打克つ事の出来たのは、幼少の時より親から信仰教育を受けたためであつた。
- 四、母は子を生んだ。然しそれは肉體を生んだのであつた。母はもう一度その子の靈が新に生れるために苦しまねばならぬのである。アウガスチンは彼の母に「我母は我にとり二重の母なりき」と曰つた。彼女は母の典型であつた。

【二】アレキサンダー大王の母

母が子を思ふ、その情には誰にも變りはございません。然し母が先づ自ら神に對する責任を考へて教育するに非ずば、眞に子供を立派なものにして行く事が出来ぬ。此事はもう大分申し上げたと思ひますが、更に此にその事を今少し徹底せしめたい存じます。

アレキサンダーミナボレオン此二大英雄の事を思ひ、その母なる人に考及ぼす事は興味のある事でございます。

アレキサンダー大王の母オリムピアスは彼を心から愛しました。然しそれは本能的の愛でございました。彼女は彼を父王のフィリップよりも、もつこ權勢のあるものとしたいこ、それ計りを考へてみました。

アレキサンダーは幼ない時から父王の戦勝の報が来る度に、彼の遊び仲間にかう言

つたといふ事です。

「父は私が諸君こそその功を頌すべき大事業を一つも残してくれぬ。」
 父王が第二の妻、マケドニア生れのクレオパトラを妻にして宴席で、女の一寸した言葉に興奮して杯を彼に投げつけ、剣を抜いて父を罵つて言ひました。

「マケドニア人よ、此處にヨーロッパよりアジアに遠征しやうとする總帥がゐる。然も彼は自分の食卓も歩き得ないのだ。」

かくて此不良少年は、翌日彼の實母オリムピウスと共に出奔してしまひました。時は流れて行つた。フィリップ王は暗殺され、世はアレキサンダーのものになりました。さうするに母のオリムピウスはマケドニアに現はれ、豪華な生活を極めました。彼女がフィリップの妾たるクレオパトラと、その腹に生れた子とを殺した事に由て見ますとフィリップの暗殺の裏面にも、彼女があつたかもしれぬと言はれてゐます。

アレキサンダーは天下の英雄でありました。然しそれは全然地上の英雄でありまし

た。彼の建てんとする國は神の國で無くして、名譽と榮華に憧るゝ地上の塔でありました。彼の不良性は王となつて益々狂暴になりました。彼は假初の浮説を信じて、忠實な將軍のバルメニオの子フィロタスを殺しました。そして出征しゝるた彼の父バルメニオに氣の毒だと一寸感じましたが、その瞬間此報が彼の耳に入らぬ前に、彼の父自身まで殺してしまはうと考へ、終に罪なき然も父王フィリップ時代よりの最良の臣バルメニオを殺してしまいました。彼はヘフェースチオンといふ臣を愛しましたが、その男は病氣療養中醫師の不在の時、醫師の命を破つて冷酒一杯を呑んで遂に死亡しました。此事を聞いたアレキサンダーはこれを悲しんだは善いが、その醫師を處刑しました。然しそれでも尙哀悼の意を現はすに足らぬとして、或村落の成年者を全部虐殺せしめたといふに至つては、言語同斷、全くヘロデ大王以上の悪人でした。かういふ狂暴な行爲をつゞけ、終に彼は惑溺暴酒の結果、病を得て死んでしまつたのでした。かういふ事を考へる時に私は彼の母の母性愛が非常に低劣なものであつたといふこ

とに深く感ぜしめられないではられません。彼女の愛はたゞ本能的の愛でした。人生の背後に神々其世界のあるを教ゆる宗教に由て導くを得なかつた彼女は、かういふ我子の生長に對し責任がないとは言はれません。彼女の宗教は淫蕩な蛇使ひの宗教であつたに聞かす時に、かうなることの寧ろ當然であつた事を覺へます。

ナボレオンの母はアレキサンダーの母は比べものにならぬ偉らいどころがありました。ナボレオンはコルシカ島の貧しい家に生れたのでしたが、好運に乗じ立身出世をして終に佛蘭西皇帝となつたといふことに就ては、皆様御承知の事ですから、此に申上げるまでもございませぬ。ナボレオンは出世をしましてから、どうも得意になつてしまつて、特に故郷の人々に對しては、何かして吐驚させる様なことを企てました。此人間の感情をウエルスはかう書いてゐます。

「見物人無くして生き得る人は世の中に極めて寥々たる者である。我々の幼年時代に於ける最初の見物人は我々の家族である。そして多くの人々は自分等が死ぬる時

に至るまでも、両親や兄弟姉妹をどうかして驚かしてやりたいといふ願望に終始驅られて居る。成功せる人々の「故郷への手紙」にして謙抑し没我との上品さを表白してゐる手紙は極めて稀である。ナザレのイエスの精神の如く天上し、向上せる人々のみが、全世界に向つて「我母我兄弟を見よ。」と叫ぶ資格があるのみである。ナボレオンを彼の如くした大なる一要素は、實にボナバルト家の一族隣人の心を驚愕せしめ愕伏せしめんとする願望に他ならなかつた。」

ナボレオンは此人間らしい雅氣を有して得意になつたものでした。彼は母親を大事にする男でした。それで母親を喜ばせるのは自分が大に成功することだと、さう考へました。「私は遠からず、母上に地上の凡てのものを捧げ得るやうになります。」そんな事を彼はよく云つたものでした。「地上の凡ての物」彼は本當にそれを得るやうになりました。彼が佛蘭西の皇帝となるや、もう天下を握つたも同じに考へました。何一つ地上の事は彼の自由にならぬものは無い様になりました。彼はことに故郷の人々の

榮進を計つてやつたり、多額の金を送つたりして、例の彼等を驚かさうございました。そして母に對しても、さうした喜ばせ方をするにつこめました。皆が彼の立身出世に驚嘆しました。然し唯一人餘りそれを喜ばなかつたのは彼の一人の母でした。その母のこころをウエルス氏の筆を借りて紹介して見ませう。

「嘗ては飢えたる一家たりしボナバルト家は、今や好運に見舞はれたのである。定めしコルシカ全島民は啞然として云ふところを知らなかつたであらう。併しながら彼を熟知せる唯一人のみは決して驚愕もしなければ、征服もされなかつた。それは彼の母であつた。ナポレオンは母がそれを使つて隣人を驚かして呉れる様に多額の金を送つた。人々に見せびらかす様にせよと母に要請したり、又斯の如き驚くべき世界を震撼しつゝある此息子の母に似合ふ様に生活してくれとすゝめたのであつた。然し此賢母は——嘗てナポレオンが十六歳の時祖母に苦い顔を見せたといふので此「好運兒」を折檻した事もある此母は——彼が三十二歳になつたまで、彼に魅せ

られたり欺かれたりはしなかつた。フランスは擧つて彼を禮拜したかも知れないが彼女は彼に就て何等の幻想をも持たなかつた。彼女は彼が送つてくれた金を貯蓄しておき、従來の生活をそのまゝ續けて行つた。「萬事が終つた時、お前は此貯金を有難く思ふだらう」と彼女は云つたのであつた。」

賢明な彼の母はナポレオンの榮達は、山師的のものであることを知つてゐました。記憶力の恐ろしく強い、頭胸の明敏な、精力絶倫で一日に四時間眠りさへすれば善いといふ、ナポレオンは實際單に好運である計りでなく、皇帝となるべき程の地上の資格を備へてゐました。然しそれは地上の資格でした。彼は餘りに才氣に頼み過ぎてゐました。セント、ヘレナへ流されてから、彼が深く考へました様な事だけでも最初からもつてゐましたら、あゝも没落は早くならなかつたでせう。彼の母親は彼の運命が追風に帆かけて行く間に、彼の運命の下り坂の急であるべき事を考へてゐました。ウエルスの言を借りるに、帝王としてのナポレオンの晩年は、

「其後の二年に於て此大山師の事業は破綻を來した。何人も、彼の主張には信を置かない様になつた。彼はもう革命者の指導者でも無く、又その助成者でも無くなつた。又再生せんとする世界を具體化した人物でもなくなつた。彼は新らしき、より醜惡な一個の專制君主であつたのだ。彼は自由思想を抱ける人々を疎外し、且教會をも敵とした——」

かうして彼が歩一步墮落して行く間に、唯一人胸を病めてゐたのは、ナボレオンの母でした。彼の榮達の極みを達して、人々がこれに眩惑されてゐました時、唯一人彼の母は胸を痛めてゐました。そして彼が次第に人心から離れて行く時、變らずに彼に思をよせてゐましたのは、彼の母でございました。私は此に母の心こいふものを責まずにはゐられません。

然し惜しいかなナボレオンの母は、愛國的の賢母、英雄の母らしい婦人でありましたが信仰の人ではありませんでした。子を育てるにこれを日々神に結びつけて來た母

ではありませんでした。

されば今日に於て、母にして子女教育こいふことを、神の子としての見地からしなければ危いこいふこみをつくづく教へらるゝのであります。

【三】 子女教育の根底

母は子供の幸福を考へる、これ程思ひの深いものではありませんまい。母は此爲には本當に全身全靈を犠牲にしても厭はないのであります。ですが一體眞に子供を幸福にするこいふことは、さういふ點が中心になるのでございませう。此のところをよく考へる必要があると存じます。子供の將來を考へまして、その幸福を祈る、さうしたこと

が一體幸福なのでせう。或母は子供が健康に一生を送つてくれるこいふこみを中心にしてゐませう。何をいふても、身體が大切である。身體さへ丈夫であればどんな成功でも出来る。身體が弱くては何も出来ない。身體の弱いこいふこみは母親の責任であ

るこころが多い。かういふ様に考へる母親は少なくないであらうと思ひます。それも全く事實です。子供一人丈夫に育てるこいな事は、母親をして並大抵の苦心ではございませぬ。達者で成人して行つてくれたらそれはどんなに母親の名譽であるか存じませぬ。母親が子供を生んだ瞬間に、本能的に感ずることは「妾の生んだ子は満足な子であつたかしら？」と、さういふこころを感ずるさうであります。五本の指が六本ありはしなかつただらうか。もし不具な子は生みはしなかつただらうか。さういふ様に感ずるのは、如何に母親は自分の子供に對し、その肉體の健全といふこころに全責任を感ずる本能があるかといふ事實を示すものであります。本當にそれから始まつて、這へば立て、立てば歩め、育て、行く母の苦心、風を引きはしまいかと、隙洩る風にも子供の健康を案する、母親の子供に對する注意は、實に容易ならぬものであります。

また勿論母親は自分の子供に學問教育をするこいふことに於て、實に一方ならぬ苦心をします。第一子供の智識教育の最初をなすものは母親です。見るもの聞くもの悉

く智識になつて、子供に寫つて行きますが、それを一々手に取る様に教へ込んで行くのは母親であります。それから出發して、子供が小學校へ行くやうになり、中等學校高等學校と進んで行くやうになります。そうなるに母親は以前の様に、一々自分が先に立つて教へは致しません、子供の通知簿が學校から來るに、一番先にそれを開けて、點數を心配して見るのは、やはり母親なのであります。

學校の成績が善いこ聞いた時、どんなに母親の顔は喜びに輝くでせう。そしてその反對に成績が悪いと聞くと、それはぎれだけ母親の胸を痛めることとせう。第一落第こでもなりましたら、それはどんなに寢ても立つてもおられぬ程な、母親の大きな悩みでせう。

また子供に何か不正直なことはありはすまひか、正直にして、人から後指さされるやうなこころをしてくれはすまいか、それをどんなに母親は心配する事とせう。その反對に子供の出來が善くて、他人に親切な、善良な心を有つてくれる時、母親は

それをきれ程誇りにするこゝでせう。つまり母親は子供の體育、智育、徳育と、此三つの方面を心配しまして、全く一身にその責任を感じるのであります。

私が非常に不思議に思ひますこゝはそれ程の母親が子供の宗教教育といふことには割合に冷淡であるといふことでもあります。さうして日本に於てさういふ現象を見るかといふこゝが問題だと思ひます。人間に靈魂といふものがありますならば、そしてそれが人間の一番貴いものであるならば、自分の最愛の子供の靈を育てるこゝいふこゝに恐れおのゝいて、責任を感じない母親はございませぬまい。此に日本の宗教思想といふものゝ根本的に相違したこゝろを見ます。此問題を此にどうしても考へて置かなくてはなりません。此のこゝろ暫らく理屈つほくなるか知れませんが、是非聽いていただかねばなりません。

つまりかうなんです。日本に於ては宗教といふものは、主として老人の信するものか、さもなれば智者、學者の悟りを開くところのものか、さういふものだと思ひ解してゐ

ましたから、小兒に宗教といふ様なことは、全く縁の遠いことであるとさう考へてゐたのであります。實際日本在來の宗教といふものゝ性質から申しますと、その通りであるから致し方がございませぬ。

何かの時に話し申し上げたか存じませんが、京都で基督教だけで無く各種の日曜學校代表者會といふ様なものが開かれた事がありました。その席へ私も出てゐましたがそこには佛教の日曜學校當局者もあれば、小學校の校長の中からも、市や府の教育家の方も來てゐられました。そして色々の協議事項もございました。それは非常に結構な催であると共に、一方からいふと何處を中心に結合するのかがいふこゝに疑がございました、その點が即ち小兒に宗教といふ問題でありました。

私はその時遠慮なく佛教の日曜學校では何を中心に教育してゐらるかといふこゝを質問して見ました。然しその返事はどうも徹底的ではありませんでした。私は決して佛教を批難したり、また皮肉つたりする意味で問ふたので無く、まじめに尋ねたの

でした。それは佛教といふものは大人の宗教であつて小兒の宗教とはどう考へても思へぬからでした。大乘小乗の區別がさうして子供に解りませう。俱舎成實の空觀がどうして子供に會得されませう。悟るといふことは哲學的冥想の境に入るもので無くては得られない筈であります。此佛教に於て子供に宗教教育を施すに申しますると、それは畢竟修養をせしむるといふことに止まつて來るでせう。従つて具體的な話になつて來ますと、つまり道德教育をするといふ事が主眼になるか否存じます。要するに邪念邪想を多く有たしめないやうにする。そして何時の日か佛の道を聞き易くなるやうにと、そこらが主眼では無からうか否存せられます。佛とは何であるか、此天地に佛との關係、我自身と此佛との關係如何、佛教學者に云はせますと、色々の奧妙な關係があるといふでせう。然しそれが果して子供に分る事とせうか。それは絶対に分らない、私の云はうとする點は、ただ其處ですな。さういふ考を皆もつてゐますから宗教といふことは或生長したる者の間にのみ行はるゝものにして取扱はれてゐます。

衣食足つて禮節を知るといふ事を申しますが、宗教といふものも、そんな風に考へてゐる、子供の時は身體を丈夫にして學問を磨き、正直に此世を送るやうにしてさへ置けば、宗教の必要を感じたら自ら研究もしやう、餘り若い時から宗教いぢりなごすると、何だか活氣が無くていけないさか何とか、そんな風に考へてゐる人は隨分澤山ある様に思はれます。

【三】 宗教と教育

そこでお話が前へ戻りますが、母親が子女に對して第一の肝心な點を見逃してゐたことはさういふ宗教に對する誤解から起つて來てゐると私は思ひます。其處で基督教に初心な方に此に一言して置く必要がございます。基督教に於ては、宗教々育といふものは修養の爲にするものではございません。天地萬物の造り主なる神様があるといふこと、それが人類の父にてゐますといふこと、人間は皆此神様の子で、我等はその

神の子たる靈を明らかに備へてゐる事等は極めて明瞭な事實であります。明瞭な事實でありますから、これは智者學者にも信ぜらるゝ事であると共に、どんな小さな子供にでも理解され得べきところのものであります。基督教の幼稚園とか、また日曜學校の幼稚科とかで神様の事を教へてゐる。いかにも明白に教へてゐます「神様は太陽も月も星も花も樹も、皆さういふものをお造りになりました。そして人間も、先生も、あなた方もそしてあなたがたのお父さんもお母さんも、やはり神様がお造りになつたんですから、皆神様の子なのです。私達は神様のお子なんだから悪い事なんかしやうたつて出来ないでせう」かういふ風に話したとすると、それは迷信でせうか。言葉は幼稚になつてゐるかも知れませんが、思想は幼稚ではございません。堂々たる基督教の思想なのであります。私共はどんな幼少な時からでも、此思想を抱く事が出来るこゝろいふ事は何たる幸なこととせう。此「若き日に我等の造り主を覺ゆる」といふことがされだけ人生の一大變化となる事とせう。或人は十八歳に到るまでに人間の清い心を

造らなかつたならば、生涯立派な心をもつ事が出来ぬと申しましたが、それが全體で無いとしまして、十八歳頃迄に天地の眞理を體得し、人間の靈性の高貴を握らないといふことは、その人の生涯を誤る大なる原因となります。其處に母親の氣が付きましたら、母親の最も大なる注意は、智育、體育、徳育といふその點よりも、此靈育といふ方面に大なる拂ひ方をせなければならぬといふことを悟る筈であります。其處でお話がちとかた苦しくなりましたから、此に何か實際的の例で、その一角を考へて見ませう。まあ例のスザンナ、ウエスレーといふ、母の模型として許されてゐる人を考へて見るとしませう。彼女が子女を教育し、その幸福を計つたといふ事は非常なものでしたが、彼女はその點に就てさういふ様な成功をしたでございませうか。此で彼女の息子等の事はよく傳記にも書かれますが、彼女の息女等の事は餘り書かれて居ない様です。彼女は娘が随分ありました。まあ娘をもつ母親としては、前に申

しました、智育、體育、徳育、此三つの點に心を籠めて育てるこいふこの外に母親の願ひはどうか娘に良縁を結んでやりたいこいふことでせう。もう娘が年頃になります、母親はしきりこ此事を考へます。段々と縁談はあつても、帯には短かし褌に長しこいふわけで、一向に縁談が纏らぬかうして年を老つて行く様な場合、日本の母親はことに心配し、しまひには娘が嫁くまでは、御飯を喰へても甘く無いなどこいひ出す母親も少なくはございません。これは如何に母親が娘の幸福は良縁を得せしむるにありと考へてゐるかといふ事が分りませう。それでもし良縁を與へてやれば母の名譽その反對に結婚の失敗をしたら母の失敗であるとしたら、さうなりません。スザンナウエスレーの如きは大の失敗者でありました。まあ傳記を書いたものから、彼女の娘達を事を紹介して見ませう。

スザンナ、ウエスレーの長女エミリーは、徳と、姿と、才智とが能く調和した立派な婦人でありました。彼女は音楽と詩の枝に長じてゐました。ジョン、ウエスレーは

嘗て彼女を評して、自分が今迄知つた中では、ミルトンを理解するもの彼女に及ぶものは無いと申しました。彼女の書く手紙は全く習字と作文の手本とするに適したと申します。

然も此賢婦人であつたエミリーがさうした事か結婚に於ては非常な失敗でした。彼女の良人となつた人間は、常に借金計りしてノラクラ遊んでゐる始末に了へぬ人間でした。彼女が働らいて自分こ良人こを支へて行かねばなりません。然も彼女は永い間 寡婦の様な生活を續けねばなりません。

メーリーは子供の時に怪我をして、身體は小さうございました。然し非常に顔が美しく、心もそれに伴つてゐました。此メーリーだけは比較的無難な結婚をしましたが不幸、母と子こ同じ墓の中に間もなく葬られねばならぬ様な早世をしました。

アンヌの結婚も妙に不幸に終つたのでした。彼女の父は彼女の良人の事を「彼は我家庭の瘤である」と書いてゐます。彼女は專制的で暴漢であつたその良人こ同様する

こころが出来ないで、終に彼女の子供と共に、別居せざるを得ませんでした。

ヘッテも立派な女でした。彼女は彼女の兄弟と姉妹との凡ての長所を一身に集めたやうな女であつた。歴史家は書いてゐます。姿美しく、心優に、それは此一家の中には目立つて輝やいてゐました。八歳の時に彼女は既に古語を學んでギリシャ語の聖書を読むことが出来た。は、全く嘘の様な天才ではありませんか。彼女は詩才もありました。その他明確な判断力や才智、さうしても凡ならぬ婦人でした。それがどうした運命の悪戯とでもいふものでせう。實にその結婚は不幸でした。無學で、俗悪で、不親切で、怠惰で、飲んだくれの男でした。史家が彼女の良人を敘して「世の中にかくまで不釣合な夫婦といふものは嘗て起らなかつた」と申してゐます。

マーサの結婚も悲惨なものでした。彼女は凡ての點に於てジョン、ウエスレーに酷似してゐました。彼女は餘り姉等の不幸な生活に恐れて、結婚のはかなさを感じざるを得ませんでした。然して其當時結婚しないではゐられない程財政の状態も悲境に一

家がりました。そんな事もあつたのでせう。彼女は遂に結婚しましたが、運悪く、またそれがひどい男で、終には彼女を棄て、逃げてしまふ、生れた子供は死ぬといふ様な譯で、悲しい生涯を送つたものでした。

それで一番小嬢のケツデーだけは、どうしても結婚といふことを恐れて、獨身で通した程でした。

かういふ例を考へますと、母であつたスザンナ、ウエスレーには嘸堪えられなかつた事だらうと存じます。母の成功は娘に善い婚を與へることだと思つたら、何といふこれは大きな失敗でせう。然し果して彼女は失敗したでたらうか。私は決してさう思ひません。彼女の子女教育は實に驚くべき成功であつたと思ひます。成程娘等に幸福な生活を與へる事が出来ませんでした。然し凡ての生活を聖化して行く力を娘等の中に與へて置いたそれでありませう。

私共の驚く事は此人生の悲劇に會ふた姉妹等が、如何なる場合に於ても、決して神

を恨まず、人を咄はず、その與へられた十字架を美しくほ、ねんで荷つた事であり
ます。世に最も苦き杯を嘗めつ、只嘗神に信頼して、清い一生を送つて行つた事は
實に人生史上の壯觀といつて善いかに存じます。

十字架にも數々ありますが、結婚に於ける十字架程惱ましいものは少ないでせう。
ごんな大きな犠牲を拂つてもよいから、現在の此結婚の束縛から離れて見たい。さう
考へる人は決して少ない事ではございますまい。尊敬する事の出来ぬ人を良人とし、
愛し得ないものを妻とする、共鳴しないものが同棲してゐるのは罪であるといふ様に
理屈をつけて、これを破る。今時さういふ人々もありませうが一旦結婚したといふ事
そのものに責任がある以上、そんなに單純に考へらるゝものではありません。どうし
ても完成しなければならぬ、現在の關係を聖化して行かねばならぬ。さう考へるのが
信仰に立つものゝ歩む、當然の途でございます。かうして群り起つて來る不平反感を
消して行かうとする、信仰の外にどこに逃げ場がございませう。

其處です母親が子に善い、幸な縁を與へやうとするは、誰も有つ人情であります。
またそれは是非心掛くべきことです。そして一々不幸な場合を豫想する必要はありま
すまい。然し第一どの様な不幸な家庭を作る事があつても、その時決して動じないだ
けの、信仰の教育がしてありますか、これが母親が子供に與へて置くべき大なる場面
であるのです。

其處でウエスレーの姉妹を見ますと、彼女等が様々苦い経験の中は、少しも荒廢し
た氣分を作つてゐない事に驚かされます。本當に彼等は凡ての境遇に於て、神の榮を
現はして行きました。

エミリーは良人に棄てられつゝも、ウエスレー兄弟の傳道を助けて、よい働らきを
してゐました。アンヌもあの不幸な境遇の中に死ぬ時「イエス我に近し、神は愛也」
と叫びましたが、やがてそれが彼女の生涯の信仰でありました。ヘッテを虐待した
良人は、彼女の死後、眞に自分の惡かつた事を悔ひて、ウエスレー兄弟のミッソへ來

て、敵を乞ふたのでした。然し身も心も美しくかつた彼女は遠くの昔既に良人を敵してゐました。そしてその時も天に於て彼を敵し、彼の救はれん事を願つてゐたでせう。マーサが良人から非常な迫害を受け、揚句の果てに棄てられてしまつた時も、一言も他人に向つて良人の悪口を云はなかつたといふあの心根に泣かされざるを得ません。英雄といふものは必ずしも戦場に於て花々しい活躍をなし、戦勝を得るものゝみに名づけるものではありません。私はウエスレーの姉妹の如き、人生の戦史に於ける無名の英雄であるといふことを忘はずにはゐられませんが、此逆境が來ても、それに引ずられてしまはないで、その逆境は信仰を磨く光となる、その力を與へて置くといふこと程大なる教育はございません。

お話序でございますから、ウエスレー兄弟の此方面の事を申し上げて見ますジョン、ウエスレーが結婚に於て失敗者であつたといふことは皆に知られてゐる事でございます。

ジョン、ウエスレーの娶つた妻といふのは、病的に嫉妬心が深く、怒りつほくて、ウエスレーを悩ましたことは實に非常なものであつた。歴史家はこれを精しく書いてありますが、此には餘りその方面を精しく御紹介申し上げる必要はございません。ただ史家が、ウエスレーの妻を、天下の三大悪妻の一に數へたといふことでその全般を推察する事が出来るでせう。

天下の三大悪妻と申しますと、第一はソクラテスの細君、これも随分烈しい女だつたさうでした。氣に入らぬ事があると、じき藥罐の水を良人の頭へ掛けたといふのですから堪りません。第二はこれは物語中の人物であります、舊約ヨブ記にあるヨブの妻、良人が癩病にかつて、街の外へ投げ出されてゐるが、細君は一度も見舞に行つた記事が無いといふので、これはよく分らぬ事ですが、悪妻の一つに數へられてしまひました。その三大悪妻の一角ウエスレーの妻であつたといふ。これは比較的近代の事ではありますし、確實な歴史ですが、随分ひどい女を妻としたものです。

友達は見兼ねてある時に、ウエスレーに悔みをいふたこいふ。

「君は天下にメソヂズムを主張して神の國の爲に盡さるゝ、實に祝福された御生涯だのに、ただ一つの缺點はあゝいふ奥さんを有つてゐらるゝこいふこゝで實にお氣の毒のいたりです」

随分露骨な男と見えて、こんな事を申しました。所がウエスレーの返事が、意外だつたので此男ギヤフンに參つてしまつたこいふ事です。ウエスレーはかう申しました「いや御親切は有難いが、私は決してあゝいふ家内を有つてゐるこいふ事を悲しいとは思つてゐません。私はもつこ人格の鍛練をする必要がある。その爲にはあゝいふ家妻を有つ必要があつたのであらう。私はどれだけ此事を以て、私の人格に益したか分らない、また私は非常な責任を有つてゐる。此責任を果すには、餘り家庭の樂が過ぎるやうではいけないのかもしれない。神は最善をして下さるのがから、何れにしても感謝するの外は無」

とかういふ意味の事をウエスレーは語つたこいふのであります。どうも流石に偉らしいものだと思ひます。天下の三大悪妻を向ふにまわしても、悠然として神の攝理を樂しむこいふ、偉らい度胸ではございませぬか。

處でジョン、ウエスレーの弟、チャールスこれだけは至極幸福な家庭を有つたこせられてゐます。彼は久しく孤獨な生涯を送つてゐましたが、四十歳の時に、富める貴族夫人と結婚しました。位はある、金はある、それに絶世の美人で、温良貞淑、心立の極めて優しい婦人だこいふのでありますから、史家が世に何程に幸福なる男女の一對は他に見出し難い云つたのも無理はございませぬ。然るに何事ぞ二人の間に生れた最初の子が、小さくて天然痘の爲に死んだ時、此美しい母はそれに感染して病床の人になりました。幸に一命はこりこめたが、彼女の病が癒れた時は、天下の美しくさを集めてゐた、花にまがふ豊麗な容貌は全く昔の面影を失つてゐました。二十歳も良人より年下であつた若い彼女が、今度は良人よりも二十歳も年上に見ゆる

様になりました。病後の彼女を見て、それがチャールスの妻であるといふことを識るものは一人も無かつた。云はれてゐます。それ程に彼女は一朝にして醜婦に變つてしまつたのでした。これは精神的には小さな出来事ですが。然し若い婦人にまつてどんなに傷ましい出来事でしたらう此に史家がかう書いてゐます。

「チャールスは病める前の愛にも彌まさりて姿變れる彼女を愛したり。」

三。勿論それは宗教家としても、極めて當然な事でありませう。然し彼等兄弟の中、彼のみが花の如き妻を得、幸福の中心にせられてゐました。それに一朝不意の出来事が起る、然もそれは何等彼の精神を動かさず、幸福は彌増しに幸福である、さうも其處には何か大なる力が存してゐるとしか思はれません。

凡そ彼等が人生に處して、あらゆる出来事に際して泰然として、これを神の攝理に數へて行く、このウエスレー一家の態度は何處から出て來てゐますか。それこそスザンガ、ウエスレーが心を籠めて教育して來た靈育であつたのであります。これを思ふ

三彼女が失敗ではありませんでした。彼は自分の子供に最も幸福な中心を與へてゐました。それは世に勝つた力を與へてゐたといふのでございました。

【四】母の理想

かう考へて一番始めにお話した事に立返つて見ますと、子供の體育に注意を拂ふといふことは非常に大切なことであると同時に、いかなる健康の場合に於ても人生を活動かして行く靈性を引き出して置かないならば、子供の健康といふことがそれだけの最後の力です。子供を病弱に導く事が母の不注意から起る事になつてはいけません。然し病氣だけは注意したからといつて起きないといふわけには参りません。もし不注意の事で病氣になつたらさうしますか、かういふ事で泣く親はそれだけ多いことではございませう。假に自分の子供が結核にでもなつて全快の見込みが無いといふ様な場合に

出逢ふとしますか、親の悲しきは親以外の誰にも分らない深いものでせう。かういふ

事の無いやうにと、それだけ日々の注意をして来たか分らぬものを、何いふ悲しい事だらうと、親の嘆きは、出来やうものなら自分の生命に代へても、子を救ひたいと思ふでせう。此場合に頼りとするものは醫師計りであるとしたら、何いふ心細い事とせう。醫師のする仕事の範囲は定まつてゐます。不治の銘打たれた病氣の加き、自然に任せて置くの外に道の無い事が多い。醫師の方では所謂匙を投げてしまふ。然し終まで匙を投げることの出来ぬのは本人、その本人の心を汲む親であります。さあ其處です。かういふ場合に母親の與ふべきものは何です、健康の破れたものには健康を與ふる、外に何者も貴いもの、無い事は分つてゐます。然しその健康は到底恢復が出来ないで死に迫るものとしたら、母は何を彼に與へますか、何に由て彼の心を安んじますか。

「お母さん、心細い！」

さういつて母の手を捉へた終近い病兒に對して、たゞ

「しつかりおし、今に善くなるからね。」
 ミ、たゞさういふ事は氣休めに過ぎない場合であつたら、母自身に於てそれだけの事で安んじ得やう筈はございません。その時動ぜぬ如何なるものが母の中にあるでせうか、此へ来て躰育の貴さが解つて参ります。平素健康に注意をすると同時に、子の靈魂を育て、行く母親の責任を忘れてはいけません。

「おまへは神様の子だ。妾のお預りしてゐる神様の子だ。」

さう云ひ得る一大確信が母親の胸の中に深く刻みつけられてゐませんかならば眞の子女教育は出来ないでせう。

子供がいかなる境遇に出逢つても、其處に神の榮を現はす、その力を延ばして行かなくてはなりません。それを先に結婚の例でも學びました。身體を丈夫にする事は宜しいが、强健な肉體のみが發達して、そして世の様々の誘惑に而してゐる子供の事を思ふと、母はそれだけでは枕を高くして寝る事は出来ずまい。健康を與へられたら

ば、その健康を通じて神の子たる榮を現はして行くその力が無いならば、母の教育は随分上つらなものといふの外はございません。

そして病氣になつた場合、まして死に面した場合、單に肉身の愛をそゝいで看護するといふだけでは母の與へる全體にはなりません。私共は病弱の中に神を讚美し、また非常な逆境に處して、美しい服従の精神を神に見せてゐる。さういふ若い人々などに出逢ひまする時に、私は一種の偉大な人間性に打たれます。それは小さな時から、その奥にあつた靈性が開かれてゐて、此世に於て此世だけに終らないといふ人生の大方針を立て、行く、それを導いたのは母であつたとしたら、母が子に與へるもの、中にこれ程大なる贈物はありますまい。

子供に學問をさせるといふこともまた親の責任、ここにされだけ母親がそれに心配してゐるかといふことは前に申述べました。然し此處にも信仰の無い學問は随分危険なものだと思はれます。大學校でも出ると、如何にも偉らしいものになつた様に考へて

親を親とも思はないやうになるなど、決して少ない例ではありません。然し一體母親は如何なる方針で子供に勉強をさせるといふのでせう。それが問題であります。或母親は娘を高等女學校に通はせてゐる。それで「あなたはさういふお積りでお嬢サンを高等女學校にやつてゐらつしやるのですか」と尋ねるごしますか。假にその母親がかう答へたらどうでせう。

「どういふ積りつてあなた、此頃では高等女學校位は卒業さして置きません。第一お嫁に貰ひ手がございませんわ。」

これが事實とするとその母親は子供を高等女學校に通はせるといふ事は、お嫁入りの準備で、卒業證書はつまり何の事は無い、筆筒か長持位に相當する積りである事になります。これでは教育の方針が全く違つてゐます。

然しこれ等は少ない例ではございませんね。男の子を中學校にやり、大學校にやる何の爲かといへば出世をさせる爲だといふ。出世とは何の事ですか、此世で高位高官

に登るこか、金持ちになるこか、要するに社會の地位を得るこをいふのでせう。その爲に勉強をさせるのだといふ。それでは學問をさせる方針が違ひます。中には「此頃じや中學校位卒業して置きません、第一喰つていけませんや。」そんな事をいふ。喰ふ爲に子供をあの試験制度の苦しみをさしては勉強させるのでせうか。そんな筈はありません。人間、喰ふだけの事は、何をしたつてやつて行ける。そんな事の爲に勉強をさせる筈ではありません。さういふ事を考へてゐるから學問にいふ事、人格といふものが、ちつとも調和しない人物を多く生み出して來るのであります。

學問をするこいふことは、神より與へられてゐる智能を開發して行く事である。此大精神を小さな時から子供に打ち込んで置かなくてはなりません。私は學問をすればする程、神の前に謙遜になり、學問すればする程、その人格が圓熟して行く、さういふ青年を見る時に、親の仕つけが本當にしのばれて、貴いこにおもひます。

も一つ徳育といふことを考へましたね。子供が善いこをすれば喜び、悪いことをすれば悲しむ、それは當然の親心で、それだけの事はあらゆる親に共通してゐるこを思ひます。それなのに子供が神を信じないでても、世間並に道徳的でさへあればそれで安心してゐる親の考を、非常に危いことだと思ふのであります。前に申述べました様に、人間が本當に神の子であるに不拘、神を信じないでゐるとしたら、それ程人生に大なる損失はございませぬ。此を十分に考へる必要があるのでございませぬ。凡ての境遇に對して強い人生の勝利を示して行くのは、普通の道徳的の力だけではありません。我は神の子であるといふ、その人間の大自然から生じて行くのであります。

私は近代の若い人々の中にたゞ昔から我々が教へられて來たこいふだけの道徳は本當の影のうすいものになつてゐる事に驚かされます。

私は子女を都會に出す母親の心を思ふと、全く身體が引縮るやうにおほねます或地

方の高官にゐる方が、子供を當地の高等學校に送るとて、色々に私如きものにも子供の事を宜しく頼むご手紙なごを書いて下さる、私は或時小包を受取つたが、それはその御両親からの心籠めた贈物でした。それに某大官が直筆で小包の上書きを書いてゐられたのを見て、思はず涙がにじんで来るのをおほひました。私は面識の無い方で、某牧師の紹介でたゞ入學せらるゝ時に僅かのお世話をしたに過ぎない事ですがさういふ心遣ひをせらるゝのは、子供を宜しく頼むといふ親心に過ぎない。それを具體的に云ふと、私に學問上の指導を乞はれたものではありません。どうか都會の惡習に染まぬ様にて、其處を案じての御依頼に外ならぬ事でございます。まして御母君はごんなにか日々心配してゐらつしやる事であらうご涙ぐましく思はれるのであります。私なご到底今日の都會に子供を單獨で遊學させるといふごことは出来ない事の様に思ひます。ごんな家庭の犠牲を拂つても、一人都會の荒廢し行く青年の中に投げ込む大膽がありません。私は酒を飲んだり、悪いごころへ遊びに行つたりと、さういふ様な

事のみを申すのではござせん。さういふ事は私の息子に限つて決して無い事と安心してゐらつしやる事が十分出来ませう。然しさうで無くて、ただ心が荒廢し、誰をも尊敬する氣分になれず、萬事を自己中心主義から割り出して考へる、氣儘な、その日々の氣分さういふものに由つて動いて行く、さういふ此頃の青年の心の姿を見てゐますと悪いことをしないとだけ決めて安んずるごことは出来ませぬ。もしも彼等の間に神を敬ひ、自らの足らざるを常に神の前に恐れおのゝいて、天の父の完全きを理想に進んで行かうとする、その精神を養つて行きませぬならば、決してその子供の將來に安心をするごことが出来ない時になつてゐるご私は信するのであります。

【五】母の傑作

かくて私は母の傑作さういふごことに就て、本論を結んで置きたいご存じます。段々申上げました様に、母が子女教育をする、その母の功績は種々なる方面に現はれて参り

ませう。然しその中自分の子をして、眞に人生に處しあらゆる出来事に對し、神の子たる榮を現はして行く様に子供を育てたさいふ事程大なる傑作は他にありません。偉人の母になるのも名譽であり、英雄の母になるのも宜しい。病弱の子の母になり逆境に泣く子の母となることも止むを得ないことであります。然し母は必ずあらゆる人生の出来事に出逢つて人格を落さず、神の子たるに恥かしからぬ子供の母親とならねばなりません。此立場に立つて子女を教育する方針を立つべきであります。

人間の一生涯に於て何が一番貴いものでせう。繰返し申します様に、それは實に我衷に直き靈が生れたさいふ自覺、それを人生の中心として貴い生涯を送るこれ程貴いものはございませぬ。それは聖靈の導き、神の御誘導に由るこゝは申せ、直接には母がその責任を荷ふせましたら、實に母の責任の重いこゝに驚かされます。此に於て母は子女を教育するに先立つて、先づ自らの人格の中に子供の衷から清き靈を喚起すだけの深い信仰が無くては、その責任を全うする事は出来ない筈であります。

アウガスチンが母の愛に感激しての言に「我母は我にこりて二重の母なりき」を申しました、あれでございませぬ。子の肉體を生むだけが母の責任でございませぬ。それ故に今日では生の恩いふこゝだけでは子供を導いて行く事が出来なくなりました。イエスは「新に生れずば神の國を見る事能はじ。」といひ、また「肉に由りて生るゝものは肉也、靈に由りて生るゝものは靈也」をいはせられた。肉に由りて生るゝには母が器となる。靈に由りて生るゝ事に於て、神の國を見る、その新生の生涯は聖靈の導きとは云へ、アウガスチンにまつては、全く母のモニカがその靈の再生の産者であつた。それが「我母は我にこり二重の母なりき」云ふ意味でございませぬ。アウガスチンの肉體を生んだ母のモニカは、アウガスチンが神に向つて再生せんが爲に十八年の間祈りつづけました。

アウガスチンの肉體を育てただけで母のモニカは安心しませんでした。彼の智識は次第に成長し、後代基督教神學の祖とせらるゝ程になりましたが、その智識を開いた

だけで彼女は安んじませんでした。アウガスチンが悪人でなかつた云ふことに於て母は安んずることが出来ませんでした。彼が神に離れて、暗い方角に歩いてゐるさいふことは、モニカにとりて寝ても覺めても忘れられぬ胸の惱みは消へませんでした。彼女の最後の責任は、彼が深く神に悔ひかへり、彼の靈性が眞に新に生るゝに到る迄は、解除されませんでした。此爲に彼女は祈りつゞけました。十八年の長い祈りは、全くその爲に集注されたのでした。それが終に祈りが達して、彼の中に神の子たる靈が正しく起つて参りました。彼女はそれをこんなに感謝した事でしたらう。

「お、美よ、何ぞ我がそを發見せし事のおそかりしぞや。」
 彼はかくいひつゝ、放浪の生涯を顧みました。そして暗き過去に比べつゝ、生れ變つた現在を喜びました。その法悦の度毎に彼は母の恩愛に感激して止まなかつたのでありました。

今日母の子女教育に關するお話をするに當りまして、私はスザンナ、ウエスレーの

外に、このモニカを善き模型として御紹介する事が出来るに存じます。

あゝ母はまことに神の國に於て、たとへ無き重大なる任務を荷ふ無名の勇者であります。婦人は自ら母であり、また母たるべきものである云ふ事を考へるだけで、その信仰生活は本當に引締らざるを得ないと存じます。母たりまた母たるべきものであるに知りつゝ、その日々をウカ／＼と過すとしましたら、それは非常な誤りであります。神は大學校の教授にまして、此無名の母たる子女教育家に神國の大事を托してゐらつしやるのであります。

私或時電車の中で胸を打たれたことがありました。それは勿論教育の無い婦人の事ですが、子供を連れて乗つてゐましたが、いかにもうるささうに子供を叱つてゐる様子が、どう考へても母たるの特權を全然解してゐないと思へませんでした。子供が出来た、えゝまたかさいつた様なわけで育てゝゐる彼等の事を考へるにどうでせう。皆様から御覽遊ばしたら、折角出来た可愛い子を、まあ何さいふ譯の分らぬ事だらう

女子教育

こ、さう思し召すに違ひありません。皆様は子供を大事にしてゐらつしやる凡てに注意をして可愛がつてお育てになつてゐます。然しもし皆様が、その子の靈魂に就ては餘り注意を拂つてゐらつしやらないのでしたら、神様はさう御覽遊ばすでせう。丁度皆様が、無教育な婦人が子供を粗末に扱ふのを見て、胸をお打ちになる様に、胸を打つてゐらつしやるのであります。

第四章 妻の新倫理

妻の新しい倫理

- 一、結婚すると智識が停滞し易い。新時代の妻はその有る識見に由て良人に力を協せねばならぬ。夫婦の識見一つに融け行くところ大なる光がある。
- 二、妻は宿命の兒として取扱はれた思想は過ぎ去つた。然し依然として日本の妻としての女性の環境には暗い所がある。
- 三、此環境に勝利を得るの途たゞ神の使命を感じるにある。信仰に由て如何に暗を光に變ゆることが出来るかを思はねばならぬ。今日の女性に盲従を強ふるは無理である。神に服従するの信仰に立つを要する。
- 四、妻の眞の幸福如何。快樂を追ふに非ずして使命を感じるにある。家庭に先づ要するものは理解である。共鳴が其處に生ずる。次に夫婦は常に新しい使命の感激を要する。進歩が必要である。

【一】妻の識見

以下私は少しく妻としての新しい倫理に就て考へて見ませう。私はやはり母の新しい倫理を考へました時の様に、三つの點から此事を申して見たいと思ひます。

第一は即ち「識見」であります。昔は女といふものは學問はしないもの、すれば害があつて益なきもの、如くに思つてゐました。所がその考は現代では見事に崩されてゐます。即ち小學校に於ては男女が全く同じ様に教育を受けて行く、それこそ男女同權がこゝに現はれてゐます。それから中等教育の段になりますと、男子の中學校に對する女子の高等女學校、それには多少程度の相違はありませうが、さもなくとも同様の教育を受けるのであります。それから上の高等教育に於てもそれ／＼同等のものがあるといふことは愉快なことであります。

所がさて夫婦になつて見るに、さうも女子の方は折角受けた智能を停滞させ勝にな

るのが一般の状態であります。大體が母親の考からがよく間違つてゐるこゝがござい
ます。女の子を高等女學校に通はせてゐる母親に、

「あなたは何の爲にお嬢サンを高等女學校にやつてゐらつしやいますか」と尋ねるものがあつたら、その母親は、

「何の爲にきて、第一此頃じやお嫁にやりますのに、高等女學校一つ卒業してゐな
いんじや誰も貰ひ手が無いじやありませんか。」

と答へる、讀者にそんな方は無くて、世にはそんな考をもつてゐる方は少くござい
ません。さうなるこゝ中等教育といふものは「お嫁入り道具」と同じものになつてしま
ひます。昔、長持ちだの筆筒だのそんなものに重きを置いたその代りに高等女學校卒
業の免狀一枚をお嫁入り道具にしたこゝ同じになります。古い頭の母親は假にさう考へ
てゐるとして、御本人がもしそれと同じ考へになつてゐたしたら、お嫁入りをして
子供も出来る頃には處女時代に受けた教育といふものは過去の履歷になる計りで、現

在延びて行かないことになりませう。

學校に行くこゝ行かないとを問はず、處女時代に勉學するこゝいふ事は結婚の準備でも
何でも無い。神より人に與へられた智能を開いて行く事を意味します。お嫁入をする
こゝしないこゝは、何等問題になるものではございませぬ。その間に女としての識見が養
はれて行くのであります。學校に参りましても、ただうかくこゝ學科に追はれ、試験
の事計り氣にして過ごして行くといふ様な事では學問が身につきません。さういふ勉
強のしかたは、卒業證書を握るとそれきり停滞してしまふ恐れがあります。勉學は身
につけねばならぬ。すべてが神様より與へられてゐる豊かな智識の富を我衷から開い
て行くこゝいふこゝを示します。さういふのが私のいふ識見といふものを造つて参りま
す。

單に卒業證書を握つてお嫁入をしたこゝいふ様な場合を少し考へて見ませう。家庭を
もつて見るこゝ中々思ふ様に行かぬ事が多い、勉強したいと思つても時間が無いこゝいふ

張
張
張

方もあらうし、朝から一家の炊事から子供の世話迄もしなければならぬさいふ様なものになるに、もうその日々に追はれて、何一つ新しい勉強もしない。ただ何々校出身ださいふこと位がその人の飾りになつてゐるに過ぎない。そしてうか／＼と日月は流れて、知らぬ間に年を老るなき、決して珍らしい例はお思ひにならぬでせう。此處で良人の方も同じ状態で、これは一家の生計を維持することに追はれて、讀書一つする興味も失つて、仕事から歸つて來ると、遊びに出るか寝る位のことといふ様な場合でしたら、それで天下太平であるかもしれませんが、良人の方はズン／＼勉強もし進歩もする人であるといふ場合には、直ちに夫婦の間にも立派な共鳴は出來なくなるさいふ譯でせう、そこで思はぬところから愛の破綻を來すなき、よくある例でございませう。

處女の間より自己の智識を開いて行く事に興味ある婦人は、知らぬ間に識見が出來て行きます。かゝる人は時間の有無に境遇の如何に不拘、どんな零碎な時間を活用し

ても識見を養つて行く事を忘れません。

早い話が新聞一つ讀むのにも、注意して讀むのと注意して讀まぬのとは非常に違ひます。天下の形勢が大體に於て解り、一通り凡てに目を通して、政治問題にしる社會問題にしる、一通りの見識を以て時勢の行くところを観察してゐるなどそれは一朝一夕に出来ることでないに共に、識見の出來てゐる人には、事毎に即座に明快な判断が現はれて來ませう。良人の妻に要求する智的方面は、主として此物の解る「識見であらうか」存じます。皆様には既に出來てゐらつしやる事でせうが、今日の一般の日本婦人に對しては、此點にも覺醒を促す必要があるかと存じます。

私よく米國で愉快に思つた事は、如何なる會話の中にも、同席の婦人は男子同様に入つて來て、意見を述べるといふ事でした。たゞへば男女二人づつの二夫婦が相會して雑談をするといふ様な場合、四人の同席である以上、どんな話の材料でも四人で會話をする、勿論その二人の男が何か特種の専門家で、その専門の話をすれば解らぬ事

があるかもしれないが、然しそんな話はその場合に遠慮するのが當り前ですから、四人の一座では四人の間に解らない様な話材は出さない譯ですそれで政治問題でも、社會の問題でも、文藝上の事柄でも、堂々と自己の見解を述べるさか、應答してゐるさか、いふ状態を私はよく物珍らしく感じるものであります。よく日本だと互に共鳴した同志の男女の話はともかく、二夫婦相集まつた一座、男同士は何か口角泡を飛ばして論じてゐると、女同士はいつの間にか、女同士の話を始めて、此方はさちらかこいふこ世俗な話に落ちて、二人づゝ別々の話をしてゐるなどは、皆さんには無くて、一般にはよくある例でございます。

妻に大學者は出来なくても善いですが、識見のある妻でない物足りない世の中になりました。

母の新倫理の方では母としてのスザンナ、ウエスレーを引きましたが、妻としての彼女からも教へらるゝ點が多々ございます、子供を導くに識見を有してゐた彼女は、

良人に對しても識見の高い補助者でした。傳を讀むに於て、彼女は良人のサムエル、ウエスレーよりも一枚上の人物であつたらしいのです。彼女は温良貞淑で然もピリツとしたところのある、實に理想的の婦人でした。良人は忙がしい牧師で澤山の教會を持つてゐました。良人の不在の間は、彼女のゐる村の人々が彼女に良人の代りに神様の話をする様に頼んだ。彼女は彼等の飢えたる靈魂を憐れんで、日を定めて集めてお話をした。此事を旅中で聞いた良人のサムエルはまことに嚴重な人でして、その當時女が人に道を語るさか、こいふことは、全く習慣にない事でした。それで妻に手紙を書いて「出来るなら止めたらさうだ。」と云つてよこしました。それに對するスザンナの返事は實に堂々たるものでした。要するに靈魂の餓え渴きを感じるものに、道を語るさか、こいふことは風習の如何に不拘、男女共にして宜いといふ彼女の識見でしたから、結論に

「あなたが止めろさおつしやるのでしたら止めます。然し出来るなら止めろさおつ

しやるのでしたら、止めずに續けさしていただきます。」

「書いたのです。」

反抗は女の悪徳であると共に、盲従は女の美德とは稱せられますまい。識見高くて温良貞淑な妻を今日は誰も要求するかと思ひます。

ブース大將の妻なども餘程スザンナ、ウエスレーに似通ふところのある偉い女でした。彼女は嘗て

「結婚の不幸は概ね學識、年齢、氣質修養又は經驗に於て大なる差違のあるの結果です。」

と申しましたが、彼女とブース大將の間は、さういふ點に於て凡て共鳴してゐるところがあつたのでした。史家の傳ふるところに由るに、彼女は常にいろいろの事で良人に注意をしたと申します。説教の方法に就て注意をする計りでなく、時には大將のために説教を作つたといはれてゐます。その他讀書の方法なきに就ても種々の有益な

暗示を與へたといふことです。さうして見るに彼女も夫よりも一枚上であつたかの様に見えます。此で人格の無い人だつたら大變でせう。自分の才識を鼻にかけて、さうも傍へも寄せぬといふ様なことになるかもしれせん。然し彼女は一方眞に良人を愛しこれを敬つた。史家の引いた彼女が良人に與へた一文

「お手紙は宛ら喜の天使の指頭の如く、我心のいさもやさしい琴線にふれ申候。此御返書は畢竟其琴の音の餘韻とも思し召さるべく候。貴君にして、もし此においでなされ候はば私は貴郎を引寄せて飽くまで我胸に抱き申すべく候——貴郎を記憶するやとお尋ねなされ候哉。然り兩人にかゝる事はいかに小さき事柄も、洩さず記憶いたし居候。途にてウキリアムてふ名前の兒童に會へば、他の何人にまさりて、ここに愛らしう覺ゆる様の次第に候」

さうも其處には純眞な女が現はれてゐます。それで收まつて行くわけだと思ひます一方に深い識見があつて、然もそれを誇らない、女の優美を失はない、さうも床しい

限りであると思はれます。妻としての婦人に餘り學問は要らぬといふのが昔の考であつた事は、既に申し上げました。

例の貝原益軒は女子教育の必要を論じた學者とせられてゐますが、然し彼は女子にこの程度の學問を要求しましたらう。益軒は賢夫人をもつて居り、當代に理想的の家庭をもつてゐました。益軒日記の中に、

「新平、久右衛門、助太夫、萩野儀平來る、風雨。予琵琶を弾じ、家婦等を彈ず、二更にして客歸る」

とありますが、全く琴瑟相和した間でありました。然し彼の理想とするところは所謂妻は良人を天として仕ふるこいふ思想であり、賢明な彼の妻もそれを天理としてゐました。

益軒に於て女子教育は學問を以て教育する事ではなく、女らしい女を作るこいふに

ありました。

「女子を育つるも始は大やう男子と異なる事なし。女子は他家に行きて、他人に仕ふるものなれば、こゝさら不徳にては舅姑夫の心に叶ひ難し。幼くて生先こもれる窓の内より、能く教ふべき事にこそ侍れ。」

かう曰つて女を教へて行つたのですが、さて妻としては畢竟嫁して後に、追い出されないやうな婦人とならなければならぬといふ、其處に女の眼の着けどころを置きました。

「婦人は夫の家を以て家とするが故に嫁するを歸るこいふ。いふ意は我家に歸るなり。夫の家を我家として歸るゆえ、一度行きて歸らざるは定まれる理也。されど不徳にしてしうこ夫に背き、和順ならざれば夫にすさめられ、しうとに惡まれ。父の家に追かへさる、禍あり。婦人の恥づべき事、これに過ぎたるは無し。」

此追かへさる、を恐れるこいふのが動機で、その結果は只管和順「こいふ事にあつ

たので、學問といふ様な點には没交渉でした。

それは其頃の日本に於て無理も無い事として、現代の日本に於ては通用しないこと
でせう。今日の良人は妻に眞の理解を求める、良人と妻と互に知識に於ても理解し得
ないやうな關係では、寂寞に堪へぬ世になりました。

それはやはり婦人の價値が引上げられて来た一つの證據であつて喜ばしい事だと思
ひます。かういふことを申し上げる時に、婦人の讀者の中には、男性に對する無理解
や何かに就て種々の意見をもつてゐらつしやる方があることを知つてゐます。今日の
男性が、もつと女性を尊重し、良人が妻をもつと理解するやうにならなければならぬ
今日の妻は單に良人から人形の如く撫愛せらるゝに止まるならば、自分はノラの如く
良人を去つて行くだらうと、さうお考へになるでせう。私は此書に於ては男性に對し
ての色々ないふべき事は略してゐます。ただ女性の側に立ちてのお話をしてゐる事を
御承知が願ひたいものであります。

今日の良人は妻に大なる助けを要求し始めました。スタンダルがその「性愛」の中に
引きました、

「然しながら少なくともその生涯に一度次のやうに叫ばなかつた男が果してあらう
か。

女は常に、その才智が、

胸衣と股引を見わけられる程

高まりさへすれば、

十分ものを知つてゐるといふものだ。」

といふ様な事を考へてゐるものは今日はありません。偶々自分の妻にそんな事をい
ふ良人があるにしても、多くの良人は妻に單に「自ら衣をたゝみ、席をはき、食
を調へ、うみつむぎ、縫物して子を育てる」といふ様な事だけを要求してゐないこと
は明らかになりました。丁度昔は女は家にゐるもの、男子のみ外に出るものこそせられ

ましたが、此頃の若い夫婦が常に外へ散歩に出るやうになつた如く、夫婦の識見も一つものに融合つて行くべきものだに信するものであります。

【三】妻の環境

妻といふ事を考ふるに當りまして、日本の婦人に對しては、ことに同情を寄すべき事があらうに存じます。それは學問に於ては小學校から男女共學で同じ智識を與へられてゐるに不拘、その環境に於ては、依然として未だ舊思想の勢力のもににるなければならぬ事でありませう。此に暫らく結婚といふことに對する舊思想を調べて見る必要が有ります。

良人と妻の關係、女論語にはかうあります。

「女子出で、嫁し、夫主親を爲すは前生の縁分にして、今世に婚姻するものなれば夫を以て天に比す。其義輕きに非ず。」

良人を以て天に比す、どうも今日の奥様方はそれでは收まりませんでせう。も一つ益軒の「和俗童子訓」の中から妻の心得を説いてゐるところを紹介して見ませう。

「——嫁して後は父の家に行くことも稀なるべし。況んや他の家には、やむ事を得ざるに非ずんば輕々しく行くべからず。唯使を遣はして、音聞を通はし、親しみをなすべし。其つむむる所は、しうと夫につかへ、衣服をこしらへ、飲食を調へ、内を治めて家をよく保つを以てわざとす。我身にほこり、かしこだてにて外事に預る事、ゆめく有るべからず。夫を凌ぎて物をいひ、事を恣に振舞ふべからず。これ皆女の戒むべき事なり。」

かういふ心得がさういふところから出るかと思ひます、それはやはり彼の「婦人は別に主君無し、夫を誠に主君と思ひて敬ひ慎しみて事ふべし。」であるとか、また

「それ婦人は夫を以て天とす。夫を侮る事はかへすくあるべからず。夫を侮り背

きて、天より怒り責めらるゝに至るは、これ婦人の不徳の甚だしきにて、大なる恥也」

さいふ様な思想から出て來てゐるのであります。

女が結婚の晴衣の下に白無垢の着物を着るのは、あれは死装束ださうです。一旦嫁したらば親の家に對しては死んだものとなつて行く、もうどんなことがあつても親の家には歸れないさいふ意味があるのだと申します。

「いにしへ女子の嫁する時、其母中門まで送りて戒めて曰く、汝が家に行きて必ず慎しみ、必ず戒めて、夫の心に背く事勿れと曰へり。これ古の女子の嫁する時、親の教へる禮法也。女子の父母、能く此理を言聞かせ戒むべし。女子もまた此理を心得て守り行ふべし。」

さし和俗童子訓にある、さういふ教訓の結果であると思ひます。

今日の教育では男にも女にも同じ學問を教へて、人間としての智能を啓發して行き

ながら、その道徳的方面となりまして、良妻賢母の標準をやはり此東洋の古い忍従の教にもつて行かうとする、それでは實際収まり様がございませぬ。

もし都合よく良人が學徳共に高い人格者であり、また心からこれを愛し得る場合には、良人を以て天とするさいふこも受け入れられませうが、もしその良人が低級な人物であつたり、また愛せんと努力しても愛する事の出來ぬ場合には、それこそ悲劇が生じないではゐられません。一旦結婚した後には良人に對して不満足を感じるさいふ事程不幸なこはございませぬ志を決して去らうとする様な時には、大體子供が出來てゐる、子供の愛に引かされて、涙を呑みつゝ不遇の日を送るさいふ様な境遇は決して少ないことではございませぬ。今日かゝる境遇に於ては如何なる覺悟を以て對すべきかといふ事が問題でございませぬ。

其處で日本の結婚までの道行が極めて自由になつてゐて、結婚後の不幸は全く自分が選擇を誤まつた結果であるとしたら、止むを得ない事とも申されませうが、その結

婚の道行が未だ一般には甚だ不自然に行はれてゐるのであります。

第一に日本の媒人なるものには、甚だ無責任なものが多い、恰好な縁といふものを見つけたら、たゞこれ結びつけるといふことに骨を折る、その人はその夫婦の將來の幸福といふよりも、自分の行が、りの仕事を成就するといふことに興味をもつことが多い、偶にはお禮を目的とするといふやうな、そんな怪しからぬものは問題外にしましても、媒介者の心理状態といふものは實際變態的に働きますね、此になる親戚であらうが、友人であらうが、先輩であらうが、餘り當にする事が出来ぬといふのが普通でございます。まあ談がすゝんで来ます、見合ひといふものをする、成程第一印象といふものは中々争はれぬものだから、此見合ひといふもので一生の伴侶を定めるといふことも、一つの方法かもしれませんが、然し多くは一度の會見で中々その人の凡てが解るものではありません。ことに此へ来る女の方が損です。男の方では大膽に短時間に女の全體を觀破しやうと思つて眼を光らす事も出来るにして、女の方では

さういふわけにも行かぬ、尤も今時は女の方でも中々抜目なく對手を見定めるといふ度胸が出来たやうですが中には見合が済んでから、兩親にどうだつたか聞かれても「あら、妾ちつとも見なかつたから解らないわ。」とか何とか、それで結局「お父さんや、お母さんさへ善いにおほし召しましたら、——」なんて、まあ一體日本の縁談といふものはそんな事で纏まるのが常であつたのです。これではまるで結婚といふものが富籤を引くと同じで、甘く當る事もありませうが、一方には思はぬ縁に續かつて、人知れず泣いてゐる婦人がどれだけあるか分らないのであります。

次に日本の家庭でまた西洋に見る事の出来ない制度は姑嫁が一つ家にゐるといふことです、いや一つ家にゐるといふ事は一向差支へのない事ですが、先づ姑嫁との折合は常に悪いものゝ決まつてゐる様な風俗、これは困つたものだと思ひます。

一寸聞きますと西洋の様に息子が嫁を貰うと、親の家を出て別に一軒の家を起す、それは何だか親を棄てるやうでいけないやうに見へます。日本は孝行を基礎とするか

ら、西洋の様な夫婦中心主義は、日本の風俗には相容れないなご考へる人がよくあります。然し私が米國にゐました時、成程夫婦中心の國だなき思ふことは多うございしましたが、然しその爲に親不孝の國だなき思つたことはございませんでした。息子が嫁を貰つたら親の家を出て行くといふのが原則ですが、それは扶養の義務を缺くといふ意味でない。たゞ親には親の家があり、結婚したものは獨立したものだからその爲に家が出来ないといふのみで、親には自活の途が立つてゐるか、子供が扶養の途を立てゝゐるか、それはまた別の問題であります。それから親が一人になつたといふ様な場合息子と共に生活をしてゐるといふ様な例は勿論少なくありません。要するに彼國では結婚の爲に結婚するのであるし、日本では寧ろ家の爲に結婚をするといふ様な意味がある、その點が根本から違つてゐるわけでありませう。

早い話が日本でも親の家と息子の家が離れてゐて、時折色々なものをもつて往來をするといふ様な事になると、嫁姑の問題も大分少くなるかと思はれます。

「貴郎今日はお母さんのお好きな御馳走を拵らへますから、晩の御飯に御饗應しませうか、」

「ウンそれが善からう。」

なごいふ事になるに、姑の方でも、

「貴郎、今日は嫁の好きな牡丹餅をこしらへましたが、一寸持つて行つて來まじよか。」

「あゝ行つてござれ」

といふ様なことになつて、至極かう圓滿に行くことかと思はれます。ミかく一所に住んで見ますと、互に缺點計り見へますし、中には息子の夫婦仲が餘り善すぎるに、姑の方で嫉妬をするといふ様な大脱線家も出来ませう。その上今日は思想界の過渡時代でございますから、老人夫婦と若い夫婦との間には必ず時代思想の大なる差がございまして、そこにも一方ならぬ衝突が起きます。そして毎日イガミ合はねばならぬとい

ふ様なことになつたら大變でございませう。

先年私が米國N、C、州のスプリング、ホープといふ地のフ井ツブスといふ牧師の家に滞在してゐた時の事ですが。此フ井ツブス夫人が毎日一度故郷の實母のところに手紙を書く、お母さんのところからも毎日手紙が来るのでした。それは毎日位といふのではなく、全く兩方で毎日書くといふのだから烈しいものです。これは餘り親不孝者では出来ないことか存じますね、それはさもなく私はその時思つた事でしたよ。さうも此方のお嫁さんは樂なものだ、これに比べると日本のお嫁さんは中々容易なことではいけないとね、日本で姑のある家でしたら、先づお嫁さんは里の噂すらもしては氣拙いさかう教へられてゐます。それだのに嫁が毎日里の母に手紙を書くことなつたら、これは大變、私が滯米中に最上の立派な婦人と思つた、フキツブス夫人も日本へ來ては落第といふことになります。

「まあ私のところの嫁を御覽なさい、毎日里の母に手紙を書くのですよ。毎日い

つたら、それは本當に毎日ですの、ようも毎日あゝも書く事があつたものだ、本當に驚きますね。——」

なき、告げまはるこいふ様なことになるのが先づ普通の事日本にはされてゐます。此場合に於て日本の道徳は嫁に對してどう教訓を與へるかといふ「女誠」に「曲從」といふ一章があります、曲從といふことは舅姑のいふところが非でも、嫁の方では曲けても從ふのが當然だこいふ教になるのであります。

「夫愛すこいふも、舅姑非なりこいは、此れ所謂義を以て破る者也。然らば則ち舅姑の心奈何。故に曲從より尙きは莫し。姑不なりこいひ、爾して是なる時は固より宜しく令に從ふべし、姑是なりといひ爾して非なる時も尙宜しく命に順ふべし。是非を違戻し、曲直を争分する事を得る勿れ、此則ち所謂曲從なり。」
といふのがそれでありませう。今日の新しい教育を受けた婦人をこれで落付かしめるこいふは全く無理なわけでありませう。

【三】妻と信仰

かういふ妻としての環境——今日のところは不遇を感じる方面を多く考へましたがこれを新らしい教育を受けた人々が、さういふ風に見て行くべきかといふ事を皆さんと共に考へて見ねばなりません。

由來日本人は運命に忍従するといふ思想に慣れて來ました。大體七去三從といふ教が忍従の教なのであります。女はさういふ運命に置かれたものにして、齒痒い程今日まで安んじて來たものでした。然し今日の婦人は運命を開拓しやうといふ希望に燃えてゐるのですから、たゞ運命に忍従せよといふことでは納まりません。其處で危険な自由思想となつて參ります環境を破壊するといふ外に、女の延びる途は無いといふことになります。然しそれで世の中が納まつて行くものでもありませんし、自ら眞の満足を感じるものではありません。

此で私は一體ならば婦人は結婚前にさういふ態度をもつて立つべきかといふ様な事からお話する筈ですが、夫は次の節にゆづりまして、女の環境といふ事を考へた順序にして、此では既に妻になつた方の中、寧ろ不遇を感じる方を目標としてお話する事にしたと思ひます。

良人に對する不満足と戦ひ、姑の冷遇と戦つて行くといふ様な場合、それは全く同情に値すべき戦ひであります。此悪戦苦闘を要する婦人にとつて、最良の武器は、人格と信仰であります。如何なる者も人格と信仰の人に對しては自然に頭を下げざるを得ません。それでは人格と信仰とはさういふものであるか、私はこれを二つの項目に分けてお話しをしますよりも、一緒にしてお話し致します。

信仰と申しましたが、これはよく申し上げます様に、一種の悟りといふ底のものを指すのではございません。女性が運命に翻弄されてゐる、これに對して、ちつとこれに忍従するといつた様な修養をさすのではございません。それはもう今迄繰返し教へ

られて来たところのものでございまして、今單純にさう考へてしまふ事が出来ないから問題になるわけでありませう。

此に私共の信仰は「母と信仰」といふ場所申上げました様に、天地萬物の造り主なる神を信じ、私等は人間は皆此神様の子であるといふ信仰に始まります。神様が天地萬物をお造りになり、今も生きて宇宙を支配するといふ事が眞理に信じますと、此世の出来事に對しての考が變つて参ります。そも、世の中の事を運命だと思へるのには神を信じない立場に立つからであります。神様が無く、世はたゞ何の目的も無しに移り變つて行くと考へるからこそ、凡ての出来事を單に盲目的な運命だと觀みます。然るに活ける神様の働らきを信じますと、何かしら宇宙に働いてゐる神の力を認めますさうなる。世は運命に翻弄されてゐるので無く大なる神様の攝理に由つて動いてゐる。さう考へる様になります。さて此に攝理といふことですが、無暗に何もかも神様々々といつて神様の業にしてしまふ事は勿論誤が伴ひます。たとへば自分が不養

生をして病氣になつて置きながら、神様の攝理で病氣になつた。此號する事は出来ませうまい。然しいよく病氣になつた場合に、病氣になつたのも因縁だと、かう考へるの無く、何かしらその境地を開いて行く力が與へられる、即ち私共に神様が自由といふものをお與へになつてゐます。此自由といふものが人間に與へられた大なる寶であります。神様も或る大なる計畫のものに宇宙をすゝめておいでになります。單に神の大なる力だけで瞬間に仕事をなさらないで、人間といふものを用ゐて序々に神の國を建て、お行きになる、これが私共のもつてゐる信仰でございませう。

お話がち固くなるしくなりましたが、妻として家庭の女主人公になります場合に、自分はこの家庭を通じて神の國の縮圖を示す責任がある、自分は單に媒介人の世話で男と女とを結びつけて貰つたといふ計りの關係で無く、神様から大なる使命を負はせられて此家に來たのであるといふ、此自覺が妻なる人に生ずるのを、私は信仰に申すのでございませう。此信仰に由つて凡ての事が積極的に解決し得らるゝ筈でございませう。

此信仰を以て自分の心に解決が付きませんが、さてそれが實際に現はれて行く一段となりますと、それは人格ミいふものになつて行く、その一つの例を申し上げて見ませう。今は社会的にその地位を得てゐる某氏は、その妻に對して暴君でありました。彼は僅かの事に腹を立て、妻を苛責しました。その妻は基督信徒でした。此場合彼女はさうするのが正しいでせうか、彼女は自己の權利を主張する段になるこ、實に彼と争ふてその家を出づべきでせう。然し彼女はさうしませんでした。彼女はいつも無理ミ知りつゝ、従順にしてゐました。さらば彼女は日本の昔流の運命ミ諦らめてそれに忍従してゐたのでせうか。決してさうでは無かつたのでした。さらば彼女はさういふ考に生きてゐたのでせうか。彼女は現在の境遇は神が妾を用ゆる爲めに與へてゐる玉ふミ解した。彼女は神を識つてゐるのに良人は神を識らなかつた。そして日にく放浪の生涯をつゞけてゐる。此良人をして神を識らしむるは、聖靈の力に由るミはいへ直接には自分を用ゐておいでになるミかう感じてゐたのでした。

或夜良人は酒に酔ふて生體もなく亂れて歸つて來ました。雪の降る寒い晩でした。例の亂暴をはじめて罪もないのに、妻を家の外へ投げ出した。女は寢衣のまゝ、雪の上に倒れた。良人は戸を締めて置いてそのまゝグツスリ寢込んでしまひました。夜中に彼は酔醒めの水欲しさに目が覺めて妻の床をふみ見ました時、其處に女のゐない事に氣が付きまし。そして本性になつた彼は背にした自分の亂暴をおもひ出したのでした。雪の中の女、彼は女は死んだらうと思つて、愕然ミ飛び起きて戸を明けました。繽紛ミして雪が亂れてゐました。その薄明りの中に座してゐる地上の女を見ました。彼の女は小さな熱の籠つた聲で何か曰つてゐるやうでした。ふミ耳を聳てるこそれは祈りでした。愛する良人の頑なる心を碎き、彼をして爾を識り、爾の愛に感ずるものこなさしめ玉へミ、切なる祈りをさゝけてゐるのが分りました。

此一つの事で良人は改心し、熱心な基督教徒ミなつて、妻を眞に愛し、美くしい家庭に變つて行つた。此物語は餘りに有名になつてゐる話ですからこれ以上にお話しす

る必要はありますまい。

さて此婦人は良人の考を理窟で變せしむる事の不可能を知つてゐました。一方彼女はたゞ盲従してゐたのではありません。彼女は神の使命を感じてゐたのでした。愛する良人を神の子とする、自分の双肩にその使命のかゝつてゐることを痛感いたしました。此に基督教生活があるのであります。凡ての不幸に盲従せよといふのではない。あらゆる不幸の境遇に神の使命を果す、それが基督者の意氣であります。

これも或方から直接聞いた實話でございますが、或る處に奥さん、姑、ごうしても折合の悪い家庭がありました。その姑、ごい方は熱心なる佛教信者でありましたが、ごうも嫁に對しては無理をいふ、氣に入らぬご三日も四日も物を言はないです。ごすのなさうでした。嫁の方でも負けぬ氣になつて向か物を言はねば、此方も物言はぬごいふので、暗い日々が續くごいふ、これでは堪つたものではございませぬ。此若い婦人は新しい教育を受けた方で、社會制度の缺陷ごいふ様な事が何時も頭にあ

る、外國の例などに比べて、何故に日本ではかくの如く、嫁が姑に冷遇せられなければならぬのであるか、これは實に日本の家庭制度の缺陷であるご、かういふ様な風に理窟が出て來るのですが、口にはいはいないでも、姑の日々の態度には不平不満の情に堪へないごいふ譯、さらばごいつてごうも、姑を追ひ出すわけには行かず、自分から出て行くごいふごも無意味であるごいふので、まごごに不愉快な日を送つてゐられたのなさうでした。要するに社會の缺陷を改良するごいふ事は、永い時代を要する事ですから、その方の一生だけで考へて見るご、外部から境遇を變ずる事が出來ないごしますご、内から何か光明を見出すごいふの外はない。その方は宗教を信じたならばごさう思はれた事も折々あつたごさうでした。然しその姑が佛教信者でお寺参りは盛にせらるゝ、それだのにおの態度であるごしたら宗教もいゝ加減のものご、かう見くびつてしまつて、そんな方にも興味向かず、煩悶の中に日を過ごしてゐらつしやいました。

所が或時ふミ路傍で基督教の傳道をしてゐるミころを通りかゝつて、聞くこともなしに教を聞いたのでした。その時に彼女は始めて基督教の教を聞いた。神は父であり我等の凡ては神の子である。然して我等は、それ〴〵神の御用をつミめてゐるのであるミいふ、その教が本當に身にしみて感ぜられた。何しろ賢明な婦人でしたから、その夜自分の罪を悔いた。自分は此一家を神様より預つてゐるのにそれに氣がつかなくなつた、自分の感情、自分の氣分ミいふものを先にして喜怒哀樂を感じてゐた、それが爲にされだけ自分は自分の使命を空しくしてゐたか分らぬ。わけても姑に對してもさうであつた。自分が自分一人で立つてゐたから腹が立つたのだ、成程神様は妾を此一家の光ミしてお遣はしになつたのだ、さう解したならば神の光なら凡ての暗きを照らすには置けない筈だミ、かうお考へになりました。實はその三日計りは例の姑ミ物を言はない重くるしい日が続いた時でした。

翌日になるミその奥サンは全く新しい氣分で姑に對し、何くれミ暖かい言葉でも

てなすので、姑サン頗る面喰つてゐられたが、今急に此方から物を言ふのも變だミ思つて黙つてゐたが、顔色は大分和がざるを得なかつた。朝飯がすむミ姑はお寺参りをせらるゝ定めで、黙つて家を出た、その準備をせらるゝ間に、裏の花畑へ行つて綺麗な花を束ねて來た奥サンは、姑が門を出るミころへ追つて、

「お母さん！」

ミ呼びかけた。久しくコンナなつかしみのある言葉を聞いた事の無い姑はギョツミして振向くミ、嫁が美しい花をもつて呼び止めたのでした。

「餘り美しいから、折つて参りました。お寺参りに御もちになつてはいかゞでせう。」

もう此時は、姑の方が受太刀でした。何處迄も物をいふまいミしてゐた御老人、ついうつかり

「まああれ綺麗なミミね。」

「言つてしまつた。それきり姑はお寺に行かれたが、歸り途には盛にもう嬌自慢を同行の人に聞かしたといふ、それから一家が本當に美しく納まり、後にはその奥さんも姑さんも基督信徒になられた。承はります。」

「こんなことはあなたにも向く奨励ではありませんが、私の申し上げたいと思ふ事は自分が神の使命を荷つてゐる。此自覺が環境を一變する力になる。此いふ點にあるのであります。」

【四】妻の心得

前節に於ては寧ろ逆境に處しての妻の心得になるべきことを書いたと思ひますから此には一般に妻としての心得になるべき事を書いて見ませう。

實際一般に幸福だに感ずる家庭に於きましても、考へやうに由つては無意味を感じまた意味がある様にも感じませう。

或處に大工の棟梁の妻があつて、どうも自分程つまらぬ生涯を送つてゐるものは無いと思つたといひます。朝から晩まで自分は主人なり雇人なりの食事の世話計りをしてゐる。まるで自分は飯焚きに此世に生れて來たのだ。かう彼女は考へたのでした。處が此女或夜夢を見た。其夢に自分は知らぬ間に天國の様なところに來てゐました。見るとどうも何ともいへぬ立派な建物が並んでゐました。流石棟梁の細君だけに、その建築物の前に立つて見惚れてゐました。其處を天の使が通りかゝつたので、

「どうもこれは立派なお家が並んでゐますが、これは一體どういふ方がお建てになりましたのですか。」

「尋ねましたら、その天の使は、

「これは皆あなたが建てた家だ。」

「答へたといふ。それで吃驚して目が覺めたが、その日からあゝ自分は毎日々々御飯焚計りしてゐるやうで、つまらないと思つて泣く。こゝが多かつたが、やはり良人の棟

梁や雇人が立派な家を建てたる爲には、妾は何かのお役に立つてゐるのだといふ事が解つて、それから自分の使命を感じて、意味のある生涯を送つたといふ、それはたしか諷刺詩の中にあつたと思ひますが、たしかに一種の教訓を含んでゐます。

讀者の皆様方にはおありにならぬかもしれませんが、實際この話の中にある様につまらぬと思ひ出したら、自分のしてゐる事が何だかつまらなくて仕様が無いといふ様にお感じになる女性の方が少なくないと思ひます。奥さんにしても、一家の事を支配して行くのに、考へやうに由ては、自分で御飯を焚かぬまでも、朝から晩まで御飯の世話計りしてゐるやうだと咄く方は少なくありません。朝は早く起きて食事の世話漸く後仕舞が出来て髪の一つも結び直すといふ時分には、もう晝の膳立を考へねばならぬ。同じ様に晝の後の後仕舞ふ夕食の世話、まあちつとも自分の時間といふものはありやしない、さういふ風に考へ出したらやりきれないでせう。その時「女は食を調ふるをわざとす。」といふだけでは全く厭になるわけです。若い夫婦で何一つ苦し

い事は無いと見ゆる一家でも、何か其處に生活の根底が無かつたら、目が覺めたら感はずにはゐられなくなりませう。白いエプロン掛けて朝の食事を作つた若い奥さんが差し向ひで香りの高い味噌汁が何かで朝食を終り、そして良人を會社か役所か、勤先に送り出す、それから後はたゞ夕刻良人が歸るのを待つだけの仕事、晝食は有合せのお茶漬ですまし只管晩の御馳走に苦心をするといふ。そして玄關に靴の音がするといそぐ良人を迎へるといふ、かう曰て見ればこれ程楽しい世界は無い様にも聞えるだらうが、これとて此生活の根底に或る大なる力を認めないならば、同じ事を毎日繰返す、無意味を感じずにはゐられないでせう。例の、

「それが女のつごめさ。女功はそれだ。女功は織り繕ひ、うみ、つむぎ、すゝぎ、洗ひ、又は食を調ふるわざをいふ。女人は外事なし、かやうの女功をつむむるを以てしわざとすこあるじやないか。」

とそれで落つくものではありません。それぢや一體妻としての幸福はさうにあるので

せう。

妻の幸福といふ事を考へる前に一體その幸福といふのはどういふ事なのでせうか。結婚の幸福といふことは單にあの約婚の時代に戀人らしい青春の血の躍る様をいふのでせうか、もしさうであるなら何といつたところでさう永くは續きますまい。子供が出來て母親になつて見るに、何といつたことで大きな女の使命が一方に横はつて來るので、すから、良人に對する愛は變らないまでも、戀人らしい華やかさは、何時かはなしに薄れて行くといふことは、さうも止むを得ないことであらうと思ひます。

それから少し長日月のこのことを考へて見ますと、年を老るに従つて、さういふ若い間の燃ゆる様な思ひは消へて、たゞそれは甘い過去の追憶として残つて行くのみになりませう。それですから結婚の幸福が、單に肉體的の戀愛にあるとしたら、それはどうしたことで遅かれ早かれ窓から逃げて行く、それは生理的にも證明される事ではございませう。

それで結婚といふものは單に或るまじまつた幸福を掴みに行くといふよりは、もつと大なる意義をもつてゐるものだといふことを第一に考へねばならぬと思ひます。凡てに於て人間は自分の幸福といふことを中心にして生くべきものではない。自分の幸福といふ事だけを求めてゐますと、何時の時か必ずその幸福といふものが、砂の上に築かれたもの、様に感ずる時があると思ひます。

結婚にしましても單に快樂を受るために、始終酔ふた様な氣分であるためにこれを求めるとしたら、それは必ず幻影が破れる時が來るでありませう。單に幸福を求めるとしたら、結婚したら凡てが幸福、結婚しなかつたら凡てが不幸といふ事が出來ますまい。結婚をしないからといって、女の一生が失敗だといひ得ない。結婚したからといって必ずしもそれだけのことが、成效を稱することが出來ません。

要するに結婚するも、せざるもそれと與へられた自分の使命を果すといふ、其處に人生の意義を認めるのが第一義でございます。

それじや結婚して何を現はすか、私は其處には二つのものが一になつて神の御榮を現はして行くといふ事が理想でなくてはならぬとさう信じます。

要するにその結果として幸福が來ませう。然し結婚は單に幸福を追ふのではなくて、男女大なる使命を荷ふて合するのが先に立たねばならぬとさういふ様に解釋するのであります。

以下夫婦間の眞の幸福、家庭の使命といふ事を中心にして、主としてこれから結婚せんとする方々に妻としての心得をお話して見ませう。

基督教に於て一夫一婦を唱へるといふのは、何の方便でもなく、それが人類に與へられたる命令であるに信するのであります。良人三妻、此二つの外に男女の肉體的結合は許されぬ。それはこれが文明國の定めだからといふのでもなく、家庭の平和のためといふでも無く、これが破れると様々の悲劇を生ずるといふためでも無く、またこれに背くと社會の批難が厭ださか、さういふ動機でも無く、たゞ私共の眞理とし

て神より與へられたる良心はこれ以外の結合を許さない。それをするのは神の律法を冒すのだから罪惡であるに感ずる、私共は眞理の生活をするの外に眞の生活は無いからあります。

神様が万物をお作りになつた。其神様が萬物の中で人間を一番尊いものとしてお造りになつた。人間は男と女とに造られたが、それは神が互に相助け合ふ様にとて、それごとく男には剛、女には柔、兩々相助け行く様に特質をお與へになつた。ところで一體人間は何のために生きて行くのであるか、神様が人間をお作りになつたのなら、人間を何の爲に此世に生かし賜ふのであるか、我々は信じます。人間は各自勝手に自分の樂しみを追ふために活るので無い。人間は神の大なる支配のもとに生きて行く筈である。それで夫婦となるに就ても、運命の絲に綾つられたと思ふことも少なくないでせうが、一旦自ら神の子と自覺して立つ時にはあらゆる境遇を活用して神の御用をつさめることが出来る、それで夫婦となるといふことも決してこれは徒らな結合で

無く、二人のものが一つになつて神の御用をつとむるためである。さういふ風に夫婦の意義を考へねばならぬのであります。此二つのものが一つになるのだから、第一に夫婦の間に共鳴が無くてはなりません。

似たもの夫婦といふことを申しますが、夫婦は知らぬ間に性質が似て来る、それを曰つたものだらうと存じます。實際妙なもので、喰べるもの、好き嫌ひさへ知らぬ間に似て來ることが能くあります。然しもつこ高尚な意味で夫婦の間に共鳴があるといふことは實に奥床しい。たゞへば音楽、美術といふ様な趣味の共鳴か、友に親切な人情に濃かな感情の共鳴かといふ様に夫婦夫婦といふ様な關係がどんなに美しい事とせう。

然し良人と妻とが必ずしも同一の趣味傾向を有たねばならぬとする、それは甚だ困難なことであるし、またそれをわざと作らうとする變なものが出るか存じます。

それで一方に夫婦の間には理解といふことが一番大切なことであるかと存じます。勿論これは妻の方にだけ求むるので無く、良人の方にも求めなければならぬものであります。

たゞへば奥さんは音楽の素養がある、そして非常にそれが好きだといふ場合、良人の方は音楽は何よりも嫌だといふ事になる、さうもこれは困つたものであります。此場合に此良人にどうしても音楽を研究して、奥さんと同程度の音楽をやれといふことはそれは無理かもしれせん。然し假にも一生を借にする自分の妻が、音楽に對する教養をもつてゐたらそれを尊重する必要がある。それを尊重するのはこれを理解するといふことであります。此理解が無いと偶々奥さんがピアノを弾いても、え、やかましいとか何にかいふことになる、さうするに全く奥さんが永い間養はれて來た趣味を埋没してしまふことになりすから、非常にこれは残酷なこと、なります。

また讀書の好きな奥さんが、讀書に興味があり、その點の修養のあるといふ場合、

良人の方でよし同じ共鳴に入つて行かないまでも、これに對する尊敬と理解をもつ様にならねばならぬ。

これは良人の方に申し上げることでしたが、これと同じ様に妻の方でも良人に對する理解をもつてゐるこいふことは、されだけ良人を力づけるこゝか分りません。

此邊から次第に夫婦といふものは二つの者が一つになつたといふ事で、二つの力を一つに合はせるこゝに由て、何か大なるものを建設するこいふ意味が解つて來るのであります。

これは皆さんの中には無いこゝでせうが、或社會に參りますと、妻は良人がその勤先で何をしてゐるやら、一向知らないといふ様なこゝがよくあります。

「御主人は會社でどんなお仕事をなすつてゐらつしやいますか？」
尋ねると、

「さあ何をしてゐますか、妾共にはよく解りませんが、朝九時に出ては三時には歸

ります。

こいつたやうな答をするものがある、かういふのになると第一に良人の方が悪い。昔の思想で「女童の知るこゝならず。」とか何ぞか、社會のこゝは女では解らぬといふ風にしてしまふ、妻に對してそんな扱をするから、妻の方でも一向良人に力を協はせるといふ訓練が出來てゐない場合が多いのがあらうと思ひます。もつと夫婦は凡てに共鳴しそして協力して行くこいふ關係にならねば眞の意義を見出すことが出來ますまい。新しい意義を感じた二人は一生新たな感激を以て協力して行く筈です。

結婚するに幸福が窓から逃げて行くこ申しますが、それは一つは結婚といふものを愛の完成の様に考へるからではありませんまいか、夫婦の愛は結婚に由て益々純化して行かねばならぬ。始めからさう考へたらいいのですね。

例に由てこれは御婦人に申す前に、男子の方に注意を促さねばならぬ點が多い。結婚をするまでは、あなたを幸福にするためにはどんなこゝでもするとか、私の全身全

愛をあなたに捧げるさか、色々の誓をしてゐるが、さて結婚して見るさ、しらぬ間に地金を出して、熱情は昔の事としてしまふなどよくある例でございます。女の方にしても結婚前の心の誓いは大分違つた感じになつて行く例は少なくないと思ひます。それで若い方に御注文申し上げることは、さうか結婚前の感激を、結婚後もつゞけて行く様にしたいものだといふことです。

人間といふものは實に慣れ易いものだと思ひます。何事にも人間は慣れてしまふ。悪い事をする人間など、最初からあんなに悪いことは出来るものではありませんが、知らぬ間に悪に慣れて、それが習慣になるさ、どんな悪いことでも出来る様になる。あゝいふ境遇によく辛抱が出来るなと思ふことがある。一度にさういふ境遇に飛び込む事は非常に六つかしいが、次第に慣れて行くさ平氣になつてしまふ。慣れるといふことはこれを善い方に使へば非常な力となるが、悪い方に使へば非常に恐ろしいものになります。慣れるさいふことは恐らく悪魔の覗ふ一番犯し易い人間の弱點であるか

こ 存 じ ます。

此事からいろくの事が教へられます。此に先づ悪魔が會議を開いて、さうかして夫婦の間を破らうとするさしたら、第一に提議することは「愛に慣れさせよ。」といふでせう。燃ゆる様な愛情で結ばれた間でも、此人間の弱點から直きにその愛に慣れさせてしまふさ、つい双方我儘も出る、其處へ悪魔がつけ込んで、窓から幸福を盗み出さうとするでせう。

ヴィクトリア女皇が第二十一回の結婚日を祝はれた時に伯父宮のレオボルトに一書をお送りになつて、二十一年の今日に於ても彼女は良人であるアルベルト殿下との間に、結婚当日と同じ熱愛に満ちてゐるさいふことをおほせられたさいふ、これは中々六つかしいことでございます。二十三四で結婚された御婦人が、四十五六歳になつて結婚当日の熱愛と同じものを有してゐるさいふ、これでは悪魔の方で幸福を奪ふ隙が無い。

それでどうか結婚前後の愛情が變らない様にした。それは愛に慣れない態度が必要でありませう。結婚して一年位もするに、ボツ／＼我儘が出て来るといふのは、どうしても油断が起るからでありませう。

然してさういふ日々新しい感激をもつといふ様なことも、どうしても宗教的な或る根底が必要であると思ひます。大體境遇に慣れるといふことは運命に支配されるこゝろをいふことを示す。良人となり妻となる、これを運命とするは一番無意味なこゝろであると思ひます。夫婦なるこゝろは、前申しました様に或大なる意味を以て結合したものであると信じ、日々新しい意味を感じて行かねばなりません。最初には色々計畫をして出發したに不拘、ついその日／＼のことに慣れてしまふと、何時の間にか平凡な、生活に追はれて生涯に變つてしまひます。

我等二人は特に神に選ばれて結合したと此意氣があつて、始めて境遇に慣れない、これ悪魔が最も入り難い點であるとおもひます。常に新しい感激が必要であります。

次には進歩のこゝろを申したい。

家庭の根底となるものは進歩のこゝろである。進歩をしない家庭は停滞する家庭、停滞する家庭は退歩する家庭であります。夫婦の愛情にしても、結婚當時の様な熱愛が間もなく失はれて行くといふことは、愛情がその後特に進歩をしないといふことを示すのであります。進歩しないならばどういふ意味かで退歩して行くのであります。それで愛情のこゝろも年を取るに従つて聖化されて行く、その進歩が無くてはならないのであります。

結婚と同時に今迄の熱心な研究などを、すっかり片付けてしまふ御婦人なきを偶に見ることがあります。女學校で勉強をする、その勉強はどれだけ結婚後に活用されて行くかといふこゝろが問題であります。相當に學校では勉強家であつた娘さんも、結婚してからは子供の世話や何かで、すっかり昔の態度は無くなつてしまふ。かうなるこゝろするに學校はその人の履歷になるだけであります。私は何々學校の出身であるか何

さかひふこは、それは過去の一經歷になるだけで、實際のその人の力は現在どう進歩してゐるかさかひふこに於て價值が定まる。學校の勉強さかひふものは社會に出てから獨り學んで進歩し得る様に、その道を開く意味なのでありますから、卒業後勉強をつけないでは意味をなさぬのであります。——結婚すれば色々の事が起つて來て中々思ふやうに勉強が出來ぬだらうとおつしやいますか、それは御尤であり、或程度までは事實であります。然しさうせ人間は皆忙がしい、皆それ／＼事情がある與へられる時間に於ては人々皆異なりませうが、然し智識を求むるに渴いてゐる心、それがあれば必ず人間は進歩しますよ。不思議にその欲が満たされるだけの機會は與へられて行くからであります。

信仰さかひふこでもさうです。處女時代に熱心に教會に行たりして、基督教を信じてる方で、結婚すると同時に一向教會にも縁遠くなつてしまつたさかひふ様な例は甚だ少なくない、さういふ事のある度に非常に悲しく思つたものであります。信仰さかひ

ふものも生長しなければならぬ、即ち一日さかひして退歩をしてはならぬものである、それが結婚さかひふことで中絶する様なことがあつてはならぬからであります。これでも結婚して見ると、先方の家風さかひふものもあり、中々信仰上の教養をすることも困難な事情が續出して來る、同情すべきところは多いですが、これまた餓え渴く如く養を慕ふのには、何かその道が與へられるさかひふことを私は確信するものであります。雖を養に入れて置く時は一時は隠れてしまふことがありませうが、その中にはその先が現はれて出る、畢竟人間さかひふものは此方に眞實熱したものがあれば、如何なる境遇もこれを厭するこゝは出來ないものであります。

それで私の申上げたいことは、あなた方の御家庭には進歩があるかさかひふこと、此にもこれは妻ある人だけの責任ではない。一家が進歩して行かねばならぬのは勿論であります。妻も良人も日々、月々、年々進歩して行く、それが家庭の理想で無くてはなりません。

一方が進歩して、一方が進歩しないといふことになるに、それは何れが良人、何れが妻の場合も、非常な不幸をもたらす、双方が進歩して行く家庭程奥床しいものはございませぬ。

さういふ進歩が出来るのは、さうしても一天の父の完全さが如く完全なるべし。一といふ此思想——我等は神の子なるが故に永久に進歩すべきものといふ此宗教的人生観から本當に湧き出づるこゝを信するものであります。

進歩はまた或意味に於て純化となる、熱烈な戀愛の發端には不純な分子が交りもしませうし、あわたましい結婚には、双方不完全なところを見出す事が多いでせう。それがたゞ女は一旦は必ず結婚すべきもの、こいふ様な、世の常の慣習で家を有ち、間もなく子供も出来ると、その日くを月日の流るゝに任せるこいふ様な事になりますと全く結婚の意義何處にあるか疑ふものも起つて來ます。

然し意義をもつて一つになつた夫婦、また意義を感じ初めた人には生活の純化が始

まります。神の教を信するこいふことは必ずその人に生活の純化を與へなければならぬ筈であります。色々人間には癖がある、それが次第に消へて行く、性質に妙なところがあつたりする、それが圓くなつて行く、人格の圓熟であります。互に神を信じ、二人のものが一つになつた關係の中に、それが必ず純化されて行かねばならぬのであります。

此反對の例に申し變へて見ますと、良人に怒りつほい癖がある、それは結婚して十年にも十五年にもなるが、一向變らない、相變らずつまらぬことに怒る、奥サンの方に照り降りの性質がある、照り降りには御機嫌の善い時は氣味の悪い程御機嫌がよく機嫌の悪い時はブツツとして黙り込んでしまふ、さういふ性質が結婚して一年頃から現はれたが、銀婚式をする頃にもやはり照つたり降つたりする——正かそんなこゝもありますまいが、そんな例が假にあるとしたら、實に困つたものであります。

家庭こいふところは一番屑の出るところであります。だから男の方でも外へ出るこ

さうも何から何まで物の分つた、柔和な人で、あの人一度でも怒つた事があるかしらと思ふ様な人でも、家へ歸るこよく雷を鳴らす、よくある例であります。奥さんの方も社交の場面に出来るこ柔和な事と羊の如き方が、家では中々荒つほいこころを見せるなき、全く無い事こは申されますまい。

所が此家庭が人格こ人格こ神に由て結ばれたこころであるこいふ、二人の間に次第に純化されて行く人格が、社會に移つて行く、さうあるべきではございませうまいか。家庭に於ては進歩すべきもの、純化すべきものゝみあつて、退歩すべく、衰ふべきものは無い。

女性の肉體の美すらも、年齢はこれを皮膚の上から奪つて行くが、人格の光を寫す影を破るこは出来ない。本當に純化されて行く人格から放たれて來る女性の美は永久に花の色移らふこと無くして輝いて行くものこ信するのであります。

かくて結ばれたる家庭は、神の國の縮圖こなるのが一番高い理想なのであります。

此には弱いもの程一番大切にせられる、此には凡て自己を中心にしきすして、一家を中心にしきてゐる。此家に於て取扱はる、社會は彼等の慈悲の眼に移る社會である。此家の眞の主はイエスキリスト、一家はこれを通して神様の榮を現はさんこころをつとめるのであります。

これは皆さんには決して無いこころですが、下層の社會に參りますこ、主人が勤先からでも歸つて來るこ、奥さん一日の出來事を詳細に報告する、それが多くは他人の批評であるといつた様なこころがあります。夕の食卓の雑談など他人の悪口で賑合ふなき何こいふ見苦しい事せう。皆様の御家庭にはそれが無い。キリストを中心こしてゐる家庭には、キリストイエスの意を以て意とする、己れを愛するが如く他人を愛する美こしい愛情を隣人にそぐ親切な會話が交はされる、美こしい事だと思はれます。朝か夕かは家に由て違ひませうが、聖められたる家庭では家拜こいふものをやる、これも形式となつては何の價値も無いものとなりませうが、心を籠めた家拜は何こいつ

てもその家庭の力でございませう。ミレーの「晩鐘」が惚ばれる、一日の農作を終つて夫婦落日を浴びて家に歸るまでの静かな祈りが思はれます。皆さんはあゝいふ境遇にはるらつしやらないでせう。それ／＼良人と妻と一日の働らきは違ひませう。然し何れにしても神と偕に朝に起きて夕に臥す、凡て御榮のためにするのだと、かう信じまする時に

けふも送りぬ 主に仕へて

御恵みを 思ふだに

喜びにて心も空になりぬ。

御旨かしこみ いそしめる身に

いこひをつぐる夕の鐘

と相唱ひつゝ、會心の祈りを合はせる事がどんなに平和な家庭の礎となることせう。

かうなつて参ります。幸福といふことは與へらるゝもので、此方がこれいふて定めて願ふべきもので無い。求むべきはたゞ神の御旨になるやうにこいふ、それが要求であるべきだと思ひます。幸福を自分で定めると、それが得られぬまでは何時までも不平不満で送るこいふことになる、然も眞に與へられてゐる幸福は見逃してしまつてゐるこいふことになるのであります。

金錢の貯へがあり、生活の安定が出来てゐるといふ事が一番一家の幸福だこいふ思つてゐる人は、さういふ事かでの安定が失はれた時は非常な失望をする、家庭の幸福といふものは富のある時には得られ、貧乏の時は失はれるこ、そんな風に考へるからこそ、幸福は來たり去つたりする様に思ふ。然し眞の幸福は境遇で左右せらるゝものでは無いのであります。

それは極端な一例であります、何かの形で自分が幸福といふものはこれ／＼こ作つてしまふ。さう考へてゐるこ中々人生思ふ様には行かぬものでありますから、實際

幸福が窓から逃げて行くことが多い。眞の幸福は一家が眞に神に仕へてゐる時に、其處に無限に與へられて行きます。此幸福は一家が享樂するの幸福だけで無くて、それは同時に神の國を富まして行くの喜びになるのであります。

第五章 女の勝利

女 勝 利

- 一、由來日本の婦人は運命に對する過信に生きた。先づ第一に此考を破らねばならぬ。
- 二、神を信ずるものにとりては運命といふものは無い。運命といふものは無神論者の人生觀にのみ生ずる思想である。
- 三、神を信ずるものは、信仰に由て運命に克つ「誰か能く世に勝たんイエスをキリストと信ずるものに非ずや」である。
- 四、イエスに従ひ奉りし女性、死に至るまで主を棄てず、女性の中に貴い物語が數々ある。
- 五、カーライルは「此世の中で一番美しいものは女であり、また一番醜いものはやはり女である」と曰つた。女は愛の使であり美の化身である筈だ。女はそのために神から世に送られた。その故に女に利己的ところが現はれて來ると醜であるし、女の愛が母性的の清く貴いものに聖化して來ると、其處世を輝やかす光を見出す。
女は美しい心の持主である、小さな鳩の如き胸の中に天地の凡てを包む様な愛が籠つてゐる筈である。

【一】 運命に對する過信

以上主として母として、また妻としての母性の生涯に就てお話ししましたが、此には一般の女性といふ問題を考へて結論に代へたいと思ひます。

第一章で申し上げました様に、今日の女性は舊倫理に由て支配さるゝ事は出来なくなりました。即ち女子は覺醒しました。自由解放を叫ぶやうになりました。男子も女子も同等の權利をもつてゐるものであるから、女子は徒らに男子に盲従する筈のもので無いといふことが分りました。

今日までの婦人は男子に盲従するといふ前に運命に盲従して來たものでした。それは女はこても世に勝つ事の出来ぬ弱いものこされて來たからでした。それにはまことに考へても齒がゆい様な例を多く私共は見つて參りました。

一例を擧げて見ます。此に或る若い婦人があつて、縁談がもち上つた。こゝ

ろがその婦人は一向それに心が動かぬ。なぜいふに自分は相當に教育を受けてゐて趣味といふ事も分る、結婚をするならば、財産は無くとも心の美しい人のところへ嫁きたい。少なくとも眞に相愛し得る人こそ一所になりたいとさう思つてゐる、然るに今度話のもち上つた先方の人はいふのは教育も何もない、相當の財産はあるといふだけの事で何も女の心を引きつける様なものは無かつたからでした。

所で、その世話をするといふ人はその生活にさしつかへぬといふ財産、それに目をつけたのでせう。實につまらないことで人間の財産など地震や火事で無くなつてしまふ事もあるし、銀行の破産一つで失つてしまふ事もある。それなのに今尙或人々は結婚の幸福といふ事を、生活の安定といふことに置く、生活といふことは考へやうに由て色々違ひますが、その人々はたゞ喰ふ事着る事の安定をさすのだから驚きます。それでその婦人を世話するに於ても、全くさういふところへ世話をするのが彼女の幸になるとさう考へてゐるのだから困ります。

かういふ日本の媒人なるもの程俗悪なものはないといふことは前に申し上げたことがあると思ひますが、此世話をする人が、その婦人にまつては何か恩義のある人であるか、郷里の先輩であるとかいふそんな關係であるとして、それでその婦人は心ではまことに悲しい事にしてゐるが、世話をする人が世話をする人なのだから、斷るここが出来ぬ、それで心に染まぬながらも、それを承諾してお嫁に行くとする、此時に此婦人がコンナ事を云つたさします。

「何事も運命だと思つて行きます。私の力でさうすることも出来ないんだもの、嫁くのは厭だけれど、斷れば義理が悪いし——」

かういふ心もちをもつた女性を、私は決して空想で書いてゐるのではありません。皆さんの御承知の方の中にも、さういふ實例は随分御存じになつてゐる事だと私は思ひます。

其處で問題は、一體こんなことは運命といふものなのでせうか、そして運命だと思

つてそんな風にして心に叶はぬところへ嫁つたりするのが果して日本の婦人の美德なのでせうか、彼等は先づ何よりも先に運命をいふものに盲従したものと曰はざるを得ません。

【二】 運命とは何ぞや

運命——一體運命なんてものがあるものでせうか。運命をいふものがあるものではない、それは人がつけた名前です。どういふものにつけた名なのでせうか、これは人間は人間の力では思ふ様にならぬといふものがある、それに對してつけた名に過ぎないのでせう。

人生といふものを凝視して見ますと、成程人間の自由にならぬものがあります。第一に人間が年を老つて行くといふこと、これには人間がどう反抗して見ましても、さうする事も出来ぬ、死といふ事がそれで、人間に定まつた死といふことをさうするこ

も出来ません。かく人間に定まつたことを運命をいふ。これは如何にもどうすることも出来ません。考へて見れば人間の生涯をいふものは、これだけの事を思つても、つまらない様な気がする。それで結局どうしたものでもせう。さういふ運命を戦つて見たところで、さう勝つことも出来ない。其處で日本に多く行はれました教では、諦むるといふことを教へた。考へたつて仕方が無い事を考へる、それは愚なことだ。始めからもつて生れた運命を諦めるの外に仕方がない。かう教へたものです。

私は婦人が運命に服従するといふ精神はやはりかういふ永い間の思想が根底をしてゐるのだと思ひます。佛教に於て因縁をいふことを教へたのも、世の中の事凡て人間の力ではさうすることも出来ぬ不思議な因縁に支配されてゐるのだと、かういふ思想を示してゐます。

人間に死といふことが死がれ難い運命である様に、婦人といふものが他に服従すべく作られたのも、一つのまぬがれ難い運命であること、かういふ様に出発するのですか

ら、色々起つて来る出来事に對し、何事も定められた運命と、かういふ様に單純に解してしまつたのであります。

運命といふ力を餘り重く解するのは、それは神様を信じないから起つて来る事であり、此で少しくお話しが理に落つるかもしれませんが、凡て人生の事を考へる前に、第一神様はあるか無いかと、此問題が先に立ちます。世に神様が無いとしたら、此世は一體どうして出来て来たのでせう。何の意味もなく、此世の中がヒヨコリ出来たのであるといふ、そして何かは知らぬが、因果の力といふ様なものに支配されてゐる、かういふ風に考へるのであります。此世の中はある目的に由て造られ、或目的に進んでゐるといふものではないといふ、所謂盲目的運命なる、其處へ人間といふものが現はれて来るのですが、此人間といふものが、また何の目的があつて生れて来たのでも無く、目的があつて生きて行くのでもない。たゞ因果の海を流れ流るゝ水の如く生きて行くのだといふ。これも全く盲目的な運命に引ずられてその日々を送る

のだといふことになります。つまり神様が無いものにして世の中の事を考へるこしまず、さうより外に考へる事は出来ない譯であります。

日本の婦人は弱々しいやうに見えて、いざいふ場合になるに、中々よく覺悟が定まる例をよく見ます。死といふ事を考へましても、暗い夜には一人では外へ得出ぬといふ様に一寸したことに恐ろしがるのが女の常ですが、病氣が何かで死が近づくといふ様な場合、男よりも女の方が覺悟が定まつてしまふ。それ等がやはり人間でさうする事も出来ぬ力には、黙して命ぜらるゝまゝにするといふ、自然の教養を経て來てゐるからであると思はれます。何事にも堪ゆる習慣がつけられて來たからでありませう。

要するに日本の婦人の今日までは運命に潔よく服従する點に於て様々感心な例を多く生みました。それで天地にその造主なる神様が無く、世界は此世以外に何の世界もないこしつゝ、尙あれ程迄に何はしらす流れてゐる運命といふ力に身を任せて進ん

で来たのでした。

【三】運命と攝理

所が教育を受ける様になつてから、女性が覺醒し、決して女は男に劣つてゐない、男女同等の権利をもつものだとして、服従を敗北とし、権利の主張をもつて、勝利だとする様になりました。然しさうしても女には女の特性があるものですから、男と同じ様にして見ても勝利の感は得られない。そこで迷ふ様になりました。

我々はその惑ひは神様を信じないからだに大膽に告白するものであります。神を信じないから神に頼らないで運命に身を任せる、それを覺醒して運命に克たうとする人々がやはり神を信じないので、頼むところは結局自分自身といふことになる。自分の學問自分の意志、さうした自分いふものに由て運命を開拓して行かうとするのですから、やはり其處には何とはしらぬ不満足なり、また矛盾なりが生ぜざるを得

ない、結局運命には克てない「誰か能く世に勝たん。」であります。

それじゃ神を信じたら運命にも克てるでせうか、これを少し申し上げたい。

問題は造物者としての神はあるかないか、此世は神の支配になつてゐるか、たゞ盲目的な運命といふものに支配をされてゐるか、さういふ事の解決にあります。今から神を信ずる立場に立つて考へて見ませう。私共は宇宙萬物をお造りになり今も尙これを支配しておいでになる神様を信じます。此世は盲目的に動いてゐるのでなくて、神様の御經綸のもに動いてゐるものだといふことを信じてゐます。神様のお造りになつた物々の中に人間が一番貴い。宇宙のあるのは即ち人間ある爲である。此人間は地上に往んでゐるが此世だけに住むべきものでなくて神と偕に永久に住むべき特權をもつてゐる。それだから此世に起つた事だけで、人間の永遠の生涯の幸不幸を判断したりしてはいけません。今日悪いと思ふことが、どわだけ末になつて善いと思ふことゝなるかも分りません。それから神様の經綸のもに出來てゐることは申せ神様だけがいろゝ、

の事をなされて人間はたゞこれを見物してゐるといふのではありません。たゞそれだけであるならば、運命といふ言を攝理といふ言に替へた計りでありまして、やはり物足りません。さうではない。神様は此世の進化の爲に、人間の完成の爲に、人間そのものに協力を求めておいでになります。人間は神様の御事業に加参することに由て眞の人間の力を養つて行く事が出来る。大さう話が理に落ちましたが、これは私共の信じてゐる信仰であります。

さてかうなつて見ますと、人間は決して運命にもみこまれるといふ様なものでなくて、いかなる運命を見ゆる世の姿も開拓し、活用して行く事が出来るのであります。然しかうなるとお尋ねになる方がありませう。それでは人間が年を老るこいふことだの、死を如何にもする事が出来ぬこいふ事なきいくら信仰があつても勝つこは出来ないぢやないか、そんな事をお尋ねになるかもしれませぬ。婦人の問題だけで無事ですが、お話序に此事を先に考へて見ませう。

年を老つて行く、なる程それに打克つ事は出来ないでせう。それは人間は誰しも次第に年を老つて行くこいふ事を如何にもする事が出来ぬこいふその意味であります。然しその年を取るこいふことは、人間の此世に屬する方面の事を考へた場合のみにいふこいでせう。早くいへば年を老るこいふことは、肉體が衰へて行く事を意味するものでせう。皮膚に皺が寄る、白髪が増へる、歯が抜ける、それは好んで支那の詩人が詠じたこころのものですが、それはどう變へるこも出来ませぬ、秦の始皇帝が不老不死の藥を求めたといふ話ですが、そんなことの出来やう筈はございませぬ。それで人間の中心は何處にあるかこいふ事が問題であります。人間の生命はたゞ此肉體だけに存してゐるこしましたら、此の肉體が老衰するこいふことは人間全體の衰滅を意味しますから、これは人間に對する致命傷こいふの外はありません。然しもし人間の眞生命は靈的生命にあるこしましたらさうでせう。靈的生命こいふことは、つまり神の子たる本質を指すのであります。人間が永久不滅の神の子であるこしたら、肉體が衰へ

ても決して衰へないところの靈魂を有つてゐる筈であります。我々はその神の子たる靈魂を生長せしめないならば何時も肉體の力にのみ支配されて靈魂があるこいふ事すらも知らずにゐるのであります。然し一旦我神の子たりて自覺して、キリストに導かれる、信仰の生涯を歩みますと、

「死よ爾の刺は何處に在りや、陰府よ、汝の勝は安にありや——我儕をして我主イエスキリストに由て勝を得しむる神に謝す。」

こいふ様になります。老も死も終に人を斃す事の出来ぬやうになるこいふのは、即ち靈の勝利であります。

かくて神の子としての不滅の自分、その住むべき永久の國を識る事に由りて眞に運命に克つ事が出来る。靈の力は世の運命を此方から支配する。此一つの事を先づ學んで置きたいのであります。

かくて神の子の自覺は運命に克つ事が出来るこいふのは、人間の意志の力でさうす

る、かうするこいふ修養の方法をいふのでなくて、造物者たる神様ご自分との間に活きた永久の關係を見出して來るからのこいふのであります。即ち此關係から考へますと、人生は盲目的な運命に支配されてゐるのでなくて、神の御經綸になれる宇宙の御仕事に自分も加參して行くこいふ、廣大な理想に立つ様になります。此處らで前の例に歸つて考へて見ませう、自分は嫁きたくないけれど、世話してくれる人が人だからこいふて泣く／＼心に染まぬ嫁入りをしたなごいふ事は實に有るまじき事だこおもひます。その人は自分が神の子だといふこいを忘れてゐる。神が自分に對して豫期しておいでになる、大なる使命を餘りに感じすぎないでゐる、さう思はねばなりません。平素信仰の深い婦人だこ思つてゐるまでも、結婚こいふ問題になるこ、案外にグラ／＼こなつてしまうこいふが多い。自分が神の子であるといふ確信が何處にあるかこ疑はしむる様な事が折々あります。何事も運命だからこいふて、身を流るゝに任せるこいふ様なこいふがあつてはなりません。運命なんてものはある筈は無い。私共は神様ご借に